教育委員会会議の概要（令和２年７月臨時会）

◆　日　　時　令和２年７月１４日（火）午後２時から午後５時５９分まで

◆　場　　所　仙台市役所本庁舎　第１委員会室

◆　出　席　者

教　育　長	佐　々　木　洋	出席
委員・教育長職務代理者	吉　田　利　弘	出席
委　　員	花　輪　公　雄	出席
委　　員	中　村　尚　子	出席
委　　員	里　村　正　治	出席
委　　員	阿子島　佳美	出席
委　　員	梅　田　真　理	欠席

◆　会議の概要

１　開　会

２　議事録署名委員の指名　　花　輪　委　員

３　協 議 事 項

（１）　令和３年度使用の仙台市立義務教育諸学校教科用図書の採択について

（担当指導主事　説明）

指　導　主　事　中学校国語について説明する。

中学校国語では、言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して国語で正確に理解し、適切に表現する資質・能力を育成することを目指し、

「（１）社会生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする」、「（２）社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う」、「（３）言葉がもつ価値を認識するとともに、言語感覚を豊かにし、我が国の言語文化に関わり、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う」の３点を目標としている。この資質・能力の育成のために、新学習指導要領では、「言葉の働きに関する事項」と「情報の扱い方に関する事項」が新設され、特に語彙指導と考えの形成の一層の充実と改善が図られた。

協議会において取りまとめた中学校国語の全発行者の特長は、別添２の別紙１、６ページにお示ししている。

主な特長については、まず、Ａ者は、現代社会の課題、悩みや葛藤、人間や生き方について考えを深める文章が取り上げられているということである。

次に、Ｂ者は、各単元の目標や内容を明確に示すことで、３年間で系統的に学習で

きるように配慮されているということである。

次に、C者は、古典に関する資料が充実しており、伝統的な文化を尊重する態度の育成が図られるように工夫されているということである。

次に、D者は、１年生冒頭部分で小学校との内容のつながりが明確に示され、接続が円滑になるように工夫されているということである。

教　育　長　ただいまの事務局の説明について、ご意見・ご質問があればお願いしたい。

（質疑なし）

教　育　長　特に無いようなので、各発行者の教科書見本本についてご意見をいただきたい。

阿子島　委　員　国語は、どの教科にも通じる基本となる教科である。言葉による見方・考え方を働かせて言語活動を行うことは全ての教科にも通じることであり、選ぶことがとても難しかった。しかし、どの教科書も掲載されている話等が多種多様で、読んでいてとても楽しかった。

まずA者からお話しさせていただく。初めに、「領域別教材一覧」が記載され、学習指導要領の指導事項との関連を提示している。その後、「この教科書の使い方」で確かな言葉の力を付けるために教科書の全体構造を提示している。「学びの道しるべ」では、学習に見通しを持たせるとともに、各教材で自他の考え方を深める言語活動が設定されており、主体的・対話的で深い学びが実践できるように工夫されている。

「読み方を学ぼう」では、思考力、判断力、表現力等を育成し、思考の方法において、どのように学べば自分の思考を広げられるのかが分かるように配慮されている。巻末には、文の基本構造や表現技法等の「読み方を学ぼう」がまとめて掲載されており、学習の系統性を意識しやすくなるように工夫されている。

また、「資料編」では、「情報を活用する」「古典芸能に親しむ」「社会生活に生かす」等、多様な資料を示し、他教科や社会生活で活用できるように工夫されている。さらに、自主的な読書等で活用できるように多くの本が紹介されている「私の本棚」や「読書の広場」、作家の「私の読書体験」等を掲載し、読書活動に生徒が興味・関心を持てるよう工夫されている。

「情報を関係づける」では、情報教育や共生社会、防災教育といった、今日的な題材を扱っており、データを読み取り、自分の考えをまとめる力の育成に配慮されている。挿絵や明るい配色など生徒の関心を高めるとともに、古典教材の写真は古典への興味を喚起するように工夫されている。

次に、B者である。初めに、「言葉の地図」と題して、課題を考えるキーワードや自ら課題を追究する方法を提示している。そして、「〇年生で学ぶ内容と身につけたい言葉の力」が掲載されている。各単元の目標及び内容が明確に示され、３年間で系統的・段階的に学習が進められるように配慮されている。全学年ともＳＤＧｓを意識した内容となっている。

各単元では、知識及び技能と思考力、判断力、表現力等の活用を図り、学習を進めることができるように構成されている。巻末には、「言葉と文法　解説編」、「言葉の自習室」には、多彩な作品や資料が掲載されている。折り込みには、「理解に役立つ言葉」と「表現に役立つ言葉」が添付されている。

教材の冒頭にある「学びナビ」では、学習内容の観点を把握することで、学習の見通しが明確になり、主体的に学習に取り組めるように工夫されている。「広がる本の世界」では、多数の本が紹介されており、読書力が向上するとともに、自主的・対話

的な学習に結び付くように配慮されている。

「学びのチャレンジ」では、問題解決的な学習が展開できるように工夫されている。

挿絵や図表、写真等は、大きさや配置、レイアウトやバランスについて、生徒の学習意欲を高め、理解を助けるものとなるように工夫されている。

次にＣ者である。初めに、小学校の復習のページがあり、その後、１年間に学ぶ内容が明示されている。さらに、「学習の進め方・教科書の使い方」が掲載されている。学習指導要領に示された国語の目標に関連して、言葉による見方・考え方を働かせながら、言語活動に取り組めるように配慮されている。

言葉の力を軸とした七つの単元で構成されており、身に付けたい知識・技能を「学びを支える言葉の力」で示し、適切に表現するとともに、正確に理解する力を育成できるように工夫されている。

「本編」、「基礎編」、「資料編」の３部構成で、中学校で身に付けさせたい言葉の力を全て学べる配列になっている。「てびき」のページが充実しており、「目標」、「問いかけ」、「言葉の力」、「振り返り」等、学習の流れを参考にしながら、自主的・自発的な学習が展開できるように構成されている。

古典の資料も充実しており、伝統的な文化を尊重する態度の育成が図られるように工夫されている。「本で世界を広げよう」や「名作を読もう」等、「読書案内」の中に多種多様な本が紹介されている。

また、「広がる言葉」、「言葉を広げよう」には、他教科の学習や実生活で必要となる言葉が例文とともに示されている。「議論する力」、「伝え合う力」、「表現する力」等、各学年の発達の段階に応じた具体的な言語活動が設定されている。

写真が鮮明で見やすく、図表の大きさや配置も工夫されている。

次にＤ者である。初めに、「学習の見通しをもとう」では、１年間の学習内容を明記し、「思考の地図」や「この教科書で学習するみなさんへ」等が掲載されている。

国語１の巻頭に、「言葉に出会うために」を設け、小学校で学習した内容を確認し、中学校へのスムーズな接続を図るように工夫されている。

「学習の窓」や「情報整理のレッスン」、「思考のレッスン」が言語技術の習得に役立つように工夫されている。

主たる教材以外にも、作品の一部や詩歌が紹介され、生徒が主体的に語彙を広げ、語感を磨くことができるように工夫されている。

各学年八つのまとまりで教材を構成し、それぞれのねらいが明確で、発達の段階や学習の持続性を考慮し、軽重を付け、バランスよく配置されるように配慮されている。

巻末に本編の補充、発展学習の指導となる教材を掲載し、知識・技能や思考力、判断力、表現力等を関連させて学習が進められるように配慮されている。

身に付けたい力と学習の進め方が明確に示されていることで、学習の見通しを持ちながら、生徒が主体的に取り組めるように工夫されている。

「読書生活を豊かに」では、「読書を楽しむ」や「本の世界を広げよう」、「広がる読書」等で、多くの本が紹介されており、生徒の多様な興味や関心に応じた図書が紹介されるとともに、魅力的な読書教材や読書活動が提示され、進んで読書が行われるよう働きかけがなされている。

また、伝統的な言語文化に触れる古典の世界も充実しており、図表等の大きさや配置、レイアウトのバランスも工夫されている。

中　村　委　員　まずＡ者である。落語、歌舞伎、能、狂言といった古典が充実しており、伝統芸能への理解が深められるよう工夫されている。また、近現代の教材も幅広く取り上げられている。

「学びの道しるべ」で学習の流れが明示されるとともに、考えを深める言語活動が設定されており、主体的・対話的な学びができるように配慮されている。

「読み方を学ぼう」で、思考力、判断力、表現力等を育成し、「思考の方法」では、どのように学べば自分の思考を広げられるかが分かるように配慮されている。

また、「領域別教材一覧」を設けることで、生徒に身に付けさせたい力が領域ごとに整理され、確実な習得への道筋が生徒にも分かるように工夫されている。

Ｂ者である。表紙裏の見開き１ページにダイナミックな写真が掲載されていることに加え、本編とも写真や色の統一が図られており、とても美しく印象的だった。

「言葉の地図」では学ぶ内容と身に付けたい力を、「学びナビ」と「ここが大事」では学習のねらいを明示し、生徒が見通しを持って学習できるように構成を工夫している。「みちしるべ」は、学習した内容が定着するような構成になっている。

単元の終わりに、学習内容に沿った「広がる本の世界」が掲載され、有名な作家の著書や現代的なテーマが取り上げられており、生徒の読書への興味・関心が高まるように工夫されている。また、教材の中には宮城県の自然が紹介されており、興味・関心を持って考えられるようになっていると思った。

Ｃ者である。「言葉の力」「学びを支える言葉の力」を冒頭で焦点化し、一覧で見られるようにすることで、生徒自身が意識して学習に取り組めるように工夫されている。

古典に関する資料が充実しており、伝統的な文化に触れ、幅広い知識が育まれるように工夫されている。

小学校での既習漢字のページが充実しており、振り返りながら主体的に学習が進められているようになっている点が好ましい。「てびき」では、学習内容を振り返り、定着を図るとともに、学習内容を踏まえ、発展した学習ができるように工夫されている。

Ｄ者である。冒頭の「学習の見通しをもとう」で、どのような力を身に付けるかを焦点化し、一覧で見ることができるようにすることで、生徒自身が意識して学習に取り組めるように工夫されている。

情報の扱い方に関する教材が取り上げられており、学年が上がるにつれてより深く学習できるように工夫されている。

落語、歌舞伎、能、狂言といった古典が充実しており、言語文化への理解が深められるような工夫がなされている。

各学年の発達に応じた教材になっており、「学習の窓」は、多様な能力を引き出す主体的な学習につながるように工夫されている。題材によっては挿絵を入れず、文章だけで想像力を育成するような工夫もなされている。

また、「本の世界を広げよう」として、各教科に関連した本を時間割のように紹介しており、生徒たちが興味を持って読書活動ができるように工夫されている。

里　村　委　員　まず、Ａ者から寸評を申し上げる。上質で内容の濃い教科書である。各教材の冒頭にある説明や、巻末の参考資料にも編集委員の心意気が伝わってきた。

フォント、色使い、ページごとの段落の立て方、教材後半の「学びの道しるべ」等、全体に読みやすい教科書になっている。

教科書前段に「領域別教材一覧」があり、教材ごとに「話す・聞く」「書く」「読む」

からどの領域に重点があるかを示しており、確かな言葉の力を付けるためのガイダンスとなっている。

また、質の高さを感じさせるような構成である。各教材で、多角的、かつ丁寧に日本語の音節はどうか、五十音図の仕組みはどうかなど、分析的な解釈も加えながら教えていく手法であると感じた。巻末には充実した参考資料が付いている。

Ｂ者である。「みちしるべ」、「学びナビ」を設欄して、学習内容を確実に習得できるように工夫されている。

教育として比較的新しいテーマであるＳＤＧｓに関して、各教材で身に付けたい言葉の力と学ぶ内容をリンクさせる記載があり、これらを通じて生徒が課題を発見したり、考えを深められたりするように工夫されている。

「表現に役立つ言葉」を重視して、自分の考え方を表現する活動場面の設定により、主体的・対話的で深い学びにつながるような工夫が見られる。

緑を基調とした落ち着いた色づかい、二段組みの表記を多用するなど、全体的に読みやすい構成になっている。

Ｃ者である。「本編」「基礎編」「資料編」の３部構成で、中学校で身に付けたい知識や技能の定着を念頭に置いた配列になっており、「言葉の力」を確実に学べるように工夫されている。

情緒的な表現となるが、何とかして国語に対する生徒の学ぶ心を奮い立たせたいという気持ちが教科書全般にわたり行き届いており、工夫をしている力強い意図が伺える。「議論する力」、「分析する力」、「整理する力」の内容が学年ごとによく整理されており、「論理的な言葉の力」の育成をねらいとした構成になっている。

古典に関する資料が充実しており、国語を通じて伝統的な文化を尊重する態度を育成しようとする試みが伺える。

小学校での既習漢字のページや「てびき」により、自分の学力を振り返りながら、中学校でも自主的に学習が進められるように工夫されている。

Ｄ者である。他の教科の基礎となる国語の力を身に付けられるように、巻末の「豊かに表現するために」の内容がとても良くできている。３年間を通じて「聞き上手になろう」を設定しており、相手の思いや考えを引き出すための力を育成するように工夫されている。ここはＤ者の特長として大切な視点である。

表紙の紙質に工夫を凝らしているほか、落ち着いた色づかいと読みやすい段取り、フォントを用いて全体的に良い構成になっている。

１年生の教科書の冒頭で、小学校の学習内容と中学校の学習内容のつながりを示し、小・中学校での接続が円滑になるように配慮されている。題材によっては、挿絵を設けずに文章に集中させるという学びを促す工夫がなされており、絵を見ずに考えさせ、生徒の想像力を引き出すよう配慮されている。

吉　田　委　員　国語科においても、これまでの教科と同様に、授業改善の三つの観点から見させていただいた。

まずＡ者である。Ａ者は、見通しを持って取り組ませるために、様々な手立てを講じている。例としてガイダンス部分では、領域ごとにどんな力を身に付けるか、その一覧が示されたり、一つの教材における学習の進め方を掲載したりしていること等が挙げられる。

また、生徒同士の協働という点では、各学年４ページ構成で、段階を経た適切なデ

ィスカッションの在り方を学習する特設コーナーを設けていることも特長である。
　各学年６～８か所にわたり文章を確かに読み取るための学習コーナーを設けていることは、深い読み取りを行うために有効な手立てである。
　資料編には、情報を活用する方法が紹介されたり、各所に「思考の方法」として事象を的確に捉えて考える手立てが示されたりしており、深い学びに結び付けられるものと思われる。
　その他、３年生において「『批判的に読む』とは」というタイトルで、クリティカルシンキングの思考法について触れていることも印象的である。
　続いて、Ｂ者である。学習の見通しについては、Ａ者同様、各教材の冒頭に学習目標を設定していることや、教材の終わりにある学びの手引の部分を事前に確認すること等を通して、生徒に学習への見通しを持たせることができるものである。
　教材の終わりに位置付けられている自己の学習状況をチェックする方法は、学習の振り返りに、主に表現活動における学習の流れの中で示されているペアによる文章校正やグループによる話し合いの進め方等は、生徒間の協働に結び付くものと思われる。
　また、教材ごとに関連事項として設定された特設コーナーには、学習内容を発展させた情報や学習を補完するような設問があり、深い学びへと結び付けることができるものと思われる。
　その他、各学年８～９か所において、ジャンルごとに設定された参考図書の紹介は、かなりの冊数であり、生徒の読書の世界を広げるきっかけとなるものである。
　次に、Ｃ者である。まず、巻頭で各領域の学びの目標がマトリックス的に示され、どのような場面に、どのようなことを目指すのかが生徒にも分かりやすく掲載されている。
　「振り返り」については、教材の終わりに、文章表現で学習の振り返りをさせていることが特長である。
　この者は、様々な場面で書く活動を取り入れていることも特長である。また、各学年３教材ずつ設定された話すこと、聞くことに関する学習内容では、話し方や聞き方の在り方を通してグループでのディスカッションの方法に結び付けるなど、対話能力を高めていく内容になっている。
　そして、各教材における学習の手引で、他の学習にも使える読解や表現に関する情報を示すコーナーがあることや文法や表現等の国語力に関する様々な技術を身に付けさせる特設ページが要所に設けられていることなどで、深い学びへと結び付けることができるものと思われる。
　また、「資料編」は、言葉に関する学習指導が３学年を系統立てた編集であり、言葉の持つ力を理解させながら、論理的な思考力、相手意識のある対話能力の習得に結び付く印象を持った。
　最後に、Ｄ者である。まず、学習への見通しについては、巻頭で、Ｃ者と同様、各領域の学びの目標がマトリックス的に示され、生徒にも分かりやすく掲載されている。また、他者同様、教材の初めの学習の目標や教材の終わりにある学びの手引の部分を事前に確認すること等を通して、生徒に学習への見通しを持たせることができるよう工夫されている。
　さらに、この学習の手引部分の多くが２ページ構成になっており、教材内容に限らず、国語力に関するコラムコーナーが設けられており、読解のポイントや用語解説を

取り上げ、積み上げることによって学びを深めることに結び付けていけるものである。

振り返りについては、教材の終わりに学んだことを振り返るコーナーが設けられ、その多くがＣ者同様、意見や考えを自分の言葉で表現させる方法を取っていることが特長である。

また、「話すこと」「聞くこと」の領域を中心にスピーチ、ディスカッション等、生徒間の関わり合いでの学習が設けられている。

深い学びに関しては、情報の取り扱いに関する学習コーナーが特設され、情報リテラシーに関する内容の扱いや、表現力に関わる様々な技能を身に付けさせるための特設ページが要所に設定されていることも特長である。巻末における読解力を高めるための用語解説や表現力を高めるための手順や手続に触れさせることも深い学びに結び付くものと思われる。

花　輪　委　員　私なりにこの教科をまとめると、言葉を用いて適切に表現したり、正確に理解したりする能力を学び、加えて我が国の言語文化を育てる力を身に付けることを目標にしている教科と言える。

今回、４者から教科書の提案があったが、いずれの者も扱う教材やその配列、学びの視点を提供し、学習における生徒たちの活動を通じてこの目標を達成するよう配慮した良い教科書である。

外形的なことを申し上げると、判は４者ともＢ５判を採用している。また、各者とも各学年１冊ずつの３分冊である。総ページ数は、多い者で 1,030 ページ、少ない者で 980 ページ程度と 50 ページほどの差はあったが、これは特に問題にするようなものではなかった。

どの者も各学年七つから九つの単元構成で、一つの単元に複数の教材を並べ、最終的に豊かな言語能力を身に付けることを目指している。また、いずれの者も巻末には各学年で 80 ページから 100 ページの文法のまとめや漢字の表等の資料を付けているが、この内容に各者の工夫が表れている。以下、各者に対する寸評である。

Ａ者である。この者の単元のくくりは、「豊かに想像する」「わかりやすく伝える」等と学習到達目標を重視した構成になっている。各学年でこのような方針を踏襲しており、学習目標が大変分かりやすいものとなっている。

各教材の末尾には、「学びの道しるべ」の中に考える視点が示されており、自学自習ができるように工夫されている点が特長である。その上で、何箇所かにグループ学習に導く教材を配置している。読む、話す、聞く、まとめて書くなどの技能をバランスよく身に付けさせようとする意図が色濃く表れている教科書である。

次に、Ｂ者である。この者の単元のくくりは、他者とは違い、「表現／対話／思想」「伝統／文化／歴史」等と扱っている教材の性質によって分けているのが大きな特長である。場合によっては同じ学年でも複数回登場することがある。

この者のもう一つの特長は、多くの教材に「学びナビ」や「みちしるべ」を配して学習のポイントを分かりやすく明示していることである。これも自学自習に最適な構成となっている。

いずれの者も多くの本を紹介しているが、単元のくくりごとに「広がる本の世界」と題して１学年で 10 回、１回につき 10 冊の参考となる本を紹介している点は大変良い工夫である。

次に、Ｃ者である。この者の単元のくくりは、「言葉を楽しむ」「思いを捉える」等

で、A者と同じくこれも学習目標を重視したものとなっている。

１年生の最初の単元に入る前に、教材を使って中学国語の学習をガイダンスしている点は良い試みだと思う。

各教材の末尾には「てびき」のページがあり、理解しているかどうかを自分で確かめることができるように、その教材に関連する発展学習ができる資料を配置する工夫がなされている。具体例を挙げると、科学に関する教材の後には、根拠を明確に書く点が大事であるとするような学習である。

この者の巻末資料は、「基礎編」と「資料編」に分かれた充実したもので、どちらも進級しても有効に使えるように配慮されている。

次に、D者である。この者の単元のくくりは、「学びをひらく」「価値を見いだす」「自分を見つめる」等、A者やC者と同じく学習目標を重視したくくりとなっている。

この者の特長は、単元に入る前のガイダンスが充実していることである。例えば１年生の教科書の「声を届ける」という音読や発表のガイダンスである。「書き留める【学習の記録】」や「言葉を調べる【辞典・事典】」、辞書の使い方等を紹介しており、大変良い導入であると思う。

また、各者工夫して様々なコラムを設けているが、この者の「情報整理のレッスン」は、中でも有益なコラム、手引であると思った。

全般的に言葉に親しむ、言葉を楽しむという知性が色濃く出ている教科書のように思えた。

教　育　長　委員より各発行者の特長についてご意見をいただいた。それでは、それぞれ委員の皆さんがご自身で推薦したい発行者３者を挙げていただきたい。

阿子島　委　員　A者、C者、D者である。

中　村　委　員　A者、C者、D者である。

花　輪　委　員　B者、C者、D者である。

里　村　委　員　A者、C者、D者である。

吉　田　委　員　A者、C者、D者である。

里　村　委　員　教科書全体の中で、古文や漢文といった古典に当たる部分があるが、４者で古典に当たる部分の記載が、例えば「平家物語」など同じ作品を扱っていても、内容に違いが感じられた。中学校の教科国語の中で、高等学校の教科である古文や漢文は中学校の教科の国語の中ではどのような位置付けにあるのか。大きな構成の要素だと思うので、その点について質問させていただきたい。

指　導　主　事　我が国の言語文化に親しみ、愛情を持って享受し、その担い手として言語文化を継承・発展させる態度を小・中・高等学校を通じて育成していく。このため、高等学校の学習指導要領でも、小・中・高等学校を通じて古典に親しんだり、楽しんだり、古典の表現を味わったりする観点、古典についての理解を深める観点、古典を自分の生活や生き方に生かす観点から改善を図ることとなった。

ご質問にもあった「平家物語」や「春暁」については、４者とも取り扱っている作品である。新学習指導要領の〔知識及び技能〕（３）我が国の言語文化に関する事項のアの文末のところに、１年生と２年生においては「～古典の世界に親しむこと」、３年生においては「～その世界に親しむこと」と明示されている。作品の特長を生かして朗読すること等を通して、生徒と古典の世界との距離を縮め、古典の世界に親しむようにすることが大切であるとしている。

また、同じく指導事項のイ、「～古典に表れたものの見方や考え方を知ること」の指導に当たっては、「古典の原文に加え、古典の現代語訳、古典について解説した文章等を取り上げること」に留意することが必要であると示されている。発行者は、これらの規定の中で題材等を工夫して編集している。

教　育　長　ほかにご質問、ご意見があればお願いしたい。

（質疑なし）

教　育　長　各委員からの意見を集計すると、A者が４人、B者が１人、C者とD者が５人ということで、A者、C者、D者の３者に絞って協議を進めていきたい。

まず、この３者についてご質問、ご意見があればお願いしたい。

（質疑なし）

教　育　長　続いて、A者、C者、D者の３者について、ご自身が推薦する１者を挙げていただきたい。

里　村　委　員　１者を絞るのはなかなか厳しいものがある。まずはA者とC者の２者を推薦したいと思うが、他の委員のご意見も聞きながら協議をしていきたいと思う。

中　村　委　員　A者、C者、D者の３者ですごく迷っているところだが、私は、C者かD者を推薦したい。

花　輪　委　員　私もC者、D者がやや抜きん出ていると思った。抽象的な表現となるが、非常に切れ味が鋭いのがC者、ほんのりとして包容力があるのがD者と見ていた。C者はどちらかというと指示が明快で、D者は文章を味わってみよう、言葉を味わってみよう、言葉はいろいろな力があるのだと訴えかけているように思う。どちらを取るかというのは大変難しいので、他の委員のご意見を聞いてみたい。

阿子島　委　員　どれもすばらしい教科書だったが、その中でも、D者の１年生の教科書は、小学校から中学校へ上がるところへの配慮がとても丁寧になされている。国語は、どれが正解なのか、数学のようにはっきりと答えが出ないので、子供たちにとって難しいのではないかと感じていたが、初めの「思考の地図」等、細かく丁寧な表示で、中学校での学習内容が分かりやすい。最終的に私は、D者を推薦していきたいと思う。

吉　田　委　員　C者の特長は、明確性が前面に出ている点である。生徒が見通しを確かに立てられる、しっかりとした指示が出ている教科書である。

一方、D者の教科書は、その内容の一つ一つを確かに積み上げていくことによって、３年間で国語力がしっかり身に付くものであるという印象である。

教　育　長　里村委員からA者とC者とご意見いただいたが、各委員の意見を聞くと、C者とD者を推す意見が多かった。C者とD者で議論を進めていきたいと思うが、よろしいか。

里　村　委　員　私がA者を推薦した理由について、少し説明させていただく。

国語の教科書は、比較が難しい。私は具体的に、どの者も共通して取り扱う同じ作品を見て比較をした。例えば向田邦子の「字のない葉書」や冒頭で質問した「平家物語」、「春暁」といった漢文の扱いである。同じ題材について、書いてある中身は全く変わらないのだが、全体の絵の使い方や説明の仕方が異なるという観点から検討し、A者が一番優れていると思ったので、推薦をした。

全体の構成等については大きな差がないと思うが、国語の教科書を選ぶ際には、やはり一つ一つの物語を比較してみることが必要ではないかと思う。

教　育　長　それでは、さらに１者に絞っていただいてご意見いただきたい。

吉　田　委　員　古典が充実している観点で見ると、C者であるが、現代の課題でもある情報リテラ

シーに関する視点で見ると、毎学年で取り上げているＤ者も良い。しかしながら、他の教科と同様に授業改善に関する三つの観点で見ると、例えば対話的な学びに結び付く「話すこと・聞くこと」の領域が非常に分かりやすく紙面構成されていること、論理的な思考力を高めるために学年を踏まえた言葉の捉え方が学習の手引にしっかりと押さえられていること等から、Ｃ者を推したいと思う。

中　村　委　員　どちらも甲乙付けがたいが、最終的にはＤ者を推薦したい。それぞれ違う観点で見ると、どちらも良いところがあるのだが、「話すこと」、「聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」のバランスが取れており、思考力や表現力等が高められるような学習ができるのはＤ者ではないかと感じるので、Ｄ者を推薦したい。

花　輪　委　員　Ｄ者は、教材をじっくりと味わってもらいたいという思いが伝わる編集をしている、というのが最初の印象である。一方でＣ者は、キャラクターを多く登場させて問題提起しており、教材の読み方に対する導入時の働きかけが少し強いような印象を持った。２者とも大変良い教科書であるが、どちらの教科書で生徒たちに学んでほしいかという観点から、Ｄ者を推したい。

教　　育　　長　１者に絞るということで各委員からご意見をいただき、Ａ者が１人、Ｃ者が１人、Ｄ者が３人という結果でよろしいか。

Ｄ者以外のご推薦をいただいた吉田委員と里村委員から改めて意見をいただきたい。

吉　田　委　員　私の観点も一つだと思うが、その他の委員はまた違った観点から見てのご意見であったと解している。Ｄ者でも十分に授業に耐えられる内容と踏まえているので、多くの方の支持があるのであれば、その結論で構わない。

里　村　委　員　私の意見を申し上げる機会は、すでにいただいた。私の意見は一意見として捉えていただき、Ｄ者を推すことについては了承させていただきたい。

教　　育　　長　それでは、Ｄ者ということでよろしいか。

（異議なし）

教　　育　　長　それでは、国語については、以上ご議論いただいた内容を採択理由として事務局に整理してもらい、７月 29 日に最終的に決定したい。

続いて、次に書写について協議を行う。事務局から学習指導要領の目標等について説明をお願いする。

指　導　主　事　それでは、中学校書写について説明する。

中学校書写では、目標、改訂の趣旨共に国語科と同様である。書写では、これまでの伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項から、「内容の知識及び技能」、「（３）我が国の言語文化に関する事項」に位置付けられた。配慮事項については、特に指導計画の作成と内容の取扱いの２の（１）、ウ、（ア）に、「文字を正しく整えて速く書くことができるようにするとともに、書写の能力を学習や生活に役立てる態度を育てるよう配慮すること」、（ウ）に「毛筆を使用する書写の指導は各学年で行い、硬筆による書写の能力の基礎を養うよう指導すること」と示されている。

協議会において取りまとめた中学校書写の全発行者の特長は、別添２の別紙１、７ページにお示ししている。

主な特長について、Ａ者は、「学習のはじめに」において、小学校の学習内容を精選し、チェック欄を設けるなど、振り返りがしやすいように配慮されているということである。

Ｂ者は、「書写のかぎ」において、文字を正しく整えて書くための知識・技能が確実に習得できるように配慮されているということである。

Ｃ者は、実生活との関連が意識できるような例が示され、我が国の豊かな文字文化に触れられるように工夫されているということである。

Ｄ者は、身の回りの様々な表現が取り上げられ、発達の段階に応じて身に付けた知識・技能が日常生活の中で活用できるように配慮されているということである。

教　育　長　ただいまの事務局の説明について何かご質問やご意見等はあるか。

花　輪　委　員　教科書を見てみると、各学年でどの部分を学ぶのか、大まかな指示があるように思うが、１者を除いては、１・２年生時に分量が集中しており、３年生時が少ない。実際の書写の時間も１・２年生に集中するような運用なのか、あるいは裁量を持たせて、３学年同程度に分けるような運用も認められるのか伺いたい。

指　導　主　事　仙台市の中学校において、硬筆を使用する書写の指導は各学年で行うこと、毛筆を使用する書写の指導は各学年で行い、硬筆による書写の能力の基礎を養うよう指導することと示されており、そのとおり実施していただくようにしている。書写の時間はどの程度の時間かということだが、学習指導要領には、書写の指導に配当する授業時数は、第１学年及び第２学年では年間 20 単位時間程度、第３学年では年間 10 単位時間程度とすることと示されている。学校の実情に応じて定期的に設定しつつ、書き初めの時期等にはある程度まとめて学習するなど、工夫して実施している。

教　育　長　ほかにご質問、ご意見等はないか。

里　村　委　員　昨年、中学校の書写について、追認の協議をした。その際、４点ほど採択の理由が挙げられており、書く力を育てる、文字を正確に読み書きできるようにする、コラムや実生活に役立つ教材が充実している、そして、書写の限られた授業時間数の中での指導により適したものである、ということであった。事務局からの説明にもあったように、授業時数が随分限られているようである。そこで、質問であるが、限られた時間の中で使いやすい教科書というのは教員から見るとどういうものなのか。

指　導　主　事　使いやすいという観点では、調査研究委員会においても、様々な教科書会社の特長として挙げられている。例えば書き初めの時期以外にも、総合的な学習の時間で実施している校外学習の際に俳句を作って、書写の作品として仕上げたり、文化祭の作品と関連させて書写の学習を行ったりするなど、他教科との関連を図って書写で培った能力を学習を、日常生活に役立てることができるというようなことである。

教　育　長　他にご質問やご意見はないか。

（質疑なし）

教　育　長　それでは、各委員から各発行者の教科書見本本に対してご意見をいただきたい。

中　村　委　員　各４者の教科書を拝見させていただき、自分の書写に対する知識のなさを痛感しながらも、とても楽しく読ませていただいた。

Ａ者についてである。Ａ者は、まず最初に、目次が特長的だと思った。多くの者は１年生、２年生、３年生と分かれているが、Ａ者は、学年を分けずに学習内容に重点を置いて目次が作られている。

「学習のはじめに」では、小学校の学習内容が掲載されており、小学校の内容を振り返りやすいように配慮されている。

「コラム」や「全国文字マップ」では、文字の歴史や成り立ちが掲載されており、伝統的な文字文化の豊かさに生徒たちが触れることができ、文字への興味・関心が高

められるように工夫されている。

「学校生活」では、習得した知識・技能を他教科や学校生活に役立てる方法をイメージできるように工夫されていて良いと思った。「日常に役立つ書式」という項目があり、そこで「手紙の書き方」が紹介されており、手紙を書くことが少ない現代において、身に付いた力を日常生活に生かすことができるように工夫されている。

また、綴じ込みの「書写ブック」や「常用漢字表」を用いることで、基礎的・基本的な内容が身に付く構成になっている。

B者である。小学校の振り返りがきちんとあり、とても重要な部分である。

「文字のいずみ」では、歴史や文化に加え、職業人の文字にまつわる内容が掲載されており、文字文化を大切にする態度が育成できるように工夫されている。

「生活に広げよう」は、総合的な学習の時間や他教科との横断的な学びを生かして考える活動が設定されており、思考力、判断力、表現力等が育成されるようになっている。

「二十四節気と季節の挨拶」という折り込みがあるが、言葉の意味を解説することで日本の四季を感じさせるなど、日本の伝統文化を尊重する態度が育成されるようになっている。

教材の中の「書写のかぎ」、「生かそう」では、文字を正しく整えて書き、身に付けた知識・技能や学習内容が定着するように配慮されている。

巻末の「書写活用ブック」を活用することで、実践的な学習ができるようになっている。

C者である。「書いて身につけよう」、「書き方を学ぼう」では、基礎的・基本的な知識・技能を分かりやすく習得できるように工夫されている。

各学年末にある「やってみよう」では、これまでの学習を生かし、発展的な課題に取り組めるように配慮されている。実生活との関連が意識できるような例が示されており、生徒が身近に感じられるよう配慮されている。

巻末の「資料編」では、学習して身に付けたことが日常生活にどのように生かされているかを考えられるよう工夫されている。また、文字に関わる職業人が紹介されており、職業を多様な角度から見ることで、興味・関心が高まり、文字を通したキャリア教育にもつながるように工夫されている。

D者である。小学校までの書写の学習の振り返りやノートの書き方を確認することで、中学校の書写へスムーズに入れるように工夫されている。

「学習の進め方」では、生徒が活動する様子を写真とともに進め方が詳しく示されており、理解しやすく、学んだことが日常生活に生かせるように工夫されている。

様々な書体を使った作品が紹介されており、文字に対する興味・関心が高まるように工夫されている。

各学年に「コラム」が随所に配置されており、日本の伝統と文字文化を理解し、興味・関心が高まるように配慮されている。

里　村　委　員　まず、A者だが、書写活動への意識を高めることを目指した教科書で、例えば文字文化の豊かさに触れる多様な教材を用いている。

次に、学習指導要領にある我が国の言語文化に関する事項に鑑み、書写力の育成にとどまらず、広く我が国の伝統や文化を尊重し、郷土を愛する心情を育てるといった観点からは優れた教科書の一つである。

「書写ブック」や「常用漢字表」を使って基礎的・基本的な学びが進むように工夫されている。写真や挿絵が効果的に使われているという点も特長である。

Ｂ者だが、小学校の書写と高等学校の書道との円滑な接続を掲げて、書写の学びの大切さをある時間軸の中で教えるという工夫がなされている。

言葉の意味を解説することによって、日本の四季や伝統文化に思いをはせる内容となっており、書写の持つ深いところの学習目標に沿った教科書であると思う。

Ａ者同様、学習指導要領における書写力の育成にとどまらず、広く我が国の伝統や文化を尊重し、郷土を愛する心情を育てるという観点から、優れた教科書になっている。

Ｃ者は、学習内容が一目で分かる構成になっている。それから、実生活との関連が意識できるような例示があり、また、日本の豊かな文字文化を学ぶことができる教科書になっていると思う。

また、小学校の書写と高等学校の書道との円滑な接続を強く意識した編集になっている。楷書から行書、身の回りの文字に触れる構成になっており、書への関心を高める効果が期待される。基礎的事項から発展的事項に学びがつながるように教材選びに工夫の跡が見られる。

Ｄ者である。「学習を生かして書く」、あるいは身近な書の写真を掲載して、学んだことを日常生活に生かせるように工夫されている。一言で言えば、書写を日常生活になじませるという趣旨の色合いが濃く出た教科書だと言うことができる。

毛筆の手本が見やすく、写真も豊富に掲載されており、生徒の興味・関心の高まりに寄与する内容になっている。

吉　田　委　員　書写についても、他の教科と同様に授業改善の三つの観点から、技能の定着や書写学習の生活化に関して各者の教科書を見させていただいた。

Ａ者についてである。まず、特長として、学習区分が学年ではなく、学習内容によって扉のページが設けられ、学習が区分されていることが挙げられる。また、時間ごとにタイトルと、それを解説するように学習目標を設定していることで、こうなるためには何に気を付けて、どのようにすればよいかが明らかになっている。

特に、「考えよう」の呼びかけは、思考を通した技能習得の在り方として特長的である。

項目を設けながら、学習過程を示していることで見通しを持った学習につなげることのできる形になっている。

書写の学習を生活に生かすことについては、スペースを大きく取っているために見やすい紙面構成となっている。

その他として、行書を速さに関連付けて、その特長を認識させているとともに、毛筆の字形を硬筆に生かす練習場面が別冊になっていることが特長である。

次に、Ｂ者である。まず、巻頭にこれからの３年間で何を学ぶかが明示されているとともに、各学年の最初のページでも、それぞれの学年で何をどのような順序で学習していくのかが提示され、学習の見通しが立てやすい編集となっている。

特に、毛筆においては、何を学ぶのか、そのためにはどのようにしていけば良いのかが縦に提示されており、各時間の学習の見通しを立てることに効果的である。

学びを深めることに関しては、対象とした文字の書き方を他の文字に生かす場面を各時間で必ず設定しており、技能の定着を図っていく際に、ヒントとなることや留意

することなどを記したコーナーが設定されていることが特長である。

また、巻末の生活に生かす書写の場面では、様々な場面での書写の在り方が数多く示され、紙面構成も見やすい編集となっている。

他者でも一部あったが、運筆の方法が擬音で示され、生徒にも分かりやすく表現されている。

続いて、Ｃ者についてである。まず、各学年の学習内容が色分けされ、それぞれの学年の学習範囲が明確化されている。学習内容の配列も工夫されており、先の学習への見通しとつながりが分かりやすい。また、タイトルの下にある目標により、各時間の学習の方向性が示されている。

深い学びについては、学習したことを定着させること、他に生かしてみることなどが挙げられるが、毛筆での中心の取り方、間隔などの筆の運びを次の学習で硬筆の鉛筆の運びに生かすような編集になっており、学びの連続性による技能の確かな定着が図られる編集となっている。書写の学習を生活に生かすことについては、他者と同様に見やすい紙面構成となっている。

最後に、Ｄ者である。見通しを持って取り組めるようにするために、巻頭に、３年間でどんなことを学ぶかについてイラストで分かりやすく描くとともに、各学年の扉では、簡潔な文章で、生徒にも理解しやすいよう工夫されている。

また、教材の初めに帯状で、時系列で何を目指し、何に留意しながら学習を行うのかを明らかにしながら、学習課題においては、流れに沿った指示タイトルが記されており、生徒にも見通しが持てる内容になっている。

学習を深めることに関しては、学習したことを他の文字に生かすことを通して、定着と応用を図ろうとしていることが分かる。１年生の冒頭には最も身近であるノートの取り方を通して書写の活用を提案していることが印象的であり、手紙の書き方を大きく取り上げていることも特長であると感じた。

花　輪　委　員　この書写では、漢字や仮名の文字を楷書と行書で書くことを学び、文字文化の豊かさに触れ、自らも効果的に書く力を身に付けることを目標とする教科であると理解した。

今回、書写には国語と同じ４者から教科書の提案があった。１年生では、まず楷書を学んでから、後半で行書を学び、２年生で行書のスキルを磨いた後、３年生で文字文化の豊かさを味わうという流れになっている。

外形的なことだが、Ａ者とＣ者がＢ５判、Ｂ者とＤ者がＢ５判よりやや横長のＡＢ判を採用している。総ページ数は多い者で 157 ページ、少ない者で 129 ページである。

まず、Ａ者である。Ｂ５判で最多のページ数である 157 ページの教科書であり、練習帳としての「書写ブック」が約 30 ページあるが、これを取り外しできるように、別冊として綴じ込んでいることが大きな特長である。

また、「日常に役立つ書式」、あるいは「中学生のための漢字字典」等の資料も後にまとめて配置するような構成を取っており、楷書、行書、文字文化に触れるという３部構成が、コンパクトにまとまって配列されている点も大きな特長である。

各ページに「学習の窓」を設け、ポイントを押さえた上で、最後に学習の振り返りを行わせるという構成は大変良い工夫である。

Ｂ者である。判型がＡＢ判で、144 ページの教科書であるので、各ページの見た目に余裕があり、落ち着いたデザインとなっている。

内容的には１年生後半から行書が導入されるが、他者よりもページ数を割いて丁寧に説明しているのが印象的である。

また、各学年で、文字に関する知識を習得させる「文字のいずみ」や、古典を書き写す「書いて味わおう」を設けていることも文字に親しむ点で良い工夫である。

巻末には様々な書式や行書の形、漢字表などを含んだ「書写活用ブック」が 32 ページの資料として準備されている。様々な情報が盛り込まれており、辞書的な使い方ができるように工夫されている。

Ｃ者である。Ｂ５判、129 のページの教科書で、全体的にコンパクトにまとまった教科書との印象を受けた。

楷書も行書も説明した後に「書いて身につけよう」において、実際に練習する形式が取られている。２年生で「部分別行書一覧表」が示されている。部首の画数ごとにグループ化されており、２種類の行書が示されているのが分かりやすい工夫だと思う。

各学年の仕上げとして、グループ学習活動「やってみよう」において、１年生は新聞、２年生は情報誌、３年生は名言集を作ることを提案している点もこの者のユニークな点である。

Ｄ者である。ＡＢ判で 144 ページの教科書になっている。内容的には３年生半ばまで「行書を深めよう」、「行書と仮名を調和させて書こう」との単元を導入しているのが、他者にはない特長である。他者は全て２年生までで終わっているが、Ｄ者のみが３年生まで行書に関するコーナーを配置しており、大変好ましい構成ではないかと思う。

また、漢字と仮名を調和させて書くことに特に力を入れた構成となっており、適切な取扱いだと思う。書写に関する興味深い「コラム」が８か所に配置されており、良い配慮である。

阿子島　委　員　Ａ者からお話しする。綴じ込みの「書写ブック」には、毛筆での学習が硬筆に生かせるよう、硬筆課題が豊富に設定され、文字の書き方を確認しながら、反復練習することにより、基礎的な知識や技能を習得できるように工夫されている。

本文の初めには、「学習のはじめに」と題して小学校で学習したことを確認し、学習の進め方では「考えよう」「確かめよう」「生かそう」と見通しを持って中学校の学習活動に取り組めるように明記されている。

「コラム」や「全国文字マップ」では、伝統的な文字文化の豊かさに触れるとともに、生活との関連を意識し、文字への興味・関心を高められるように工夫されている。

「日常に役立つ書式」や「中学生のための漢字字典」等が巻末にまとめられていて、「部分別行書一覧」も掲載されている。

また、全ての書写要素を効率的に学習できるように、学習内容を焦点化して、生徒の発達段階に応じた段階的な配列になっている。教材の冒頭の「やってみよう」に、文字の原理・原則を考えたり、話し合ったりする活動を設定し、対話を通して主体性や思考力、判断力、表現力等を養えるように工夫されている。

学習のポイントを示す「学習の窓」や、課題解決のヒントを与えるキャラクター等、生徒の多様な個性や能力に広く対応できるように配慮されている。

学習の中心となる部分は大きく、それに付随する部分が小さくレイアウトされており、全体的にとても理解しやすいように工夫されている。

次に、Ｂ者である。初めに、「書写で学ぶこと」と題して、３年間で学ぶ内容を、

「書写の学習の進め方」では、「見つけよう」「確かめよう」「生かそう」と授業の進め方が記載されている。また、「小学校の学習を振り返ろう」では、小学校で学習した内容が分かりやすく示されている。

巻末に「書写活用ブック」を設け、書写で身に付けた力を学校生活だけではなく、日常生活や社会に出てからでも活用できるように工夫されている。

「文字のいずみ」では、日本の自然、歴史、文化についての資料を網羅し、文字文化を尊重する態度が育成できるように工夫されていると思う。

各教材に「目標」と「書写のかぎ」を明示し、教材末には「振り返って話そう」を設け、ポイントを確認しながら学習できるように構成されている。また、学んだことを主体的に対話できるようにも工夫されている。

文字を書く様々な場面で参考になるように、ノートやメモ、手紙、ポスター等、多様な実例を豊富に掲載し、身に付けた知識及び技能を生活の中で生かせるように配列されている。

「防災訓練に参加しよう」、「職場訪問をしよう」では、総合的な学習の時間や他教科による横断的な学習ができるように工夫されている。

学習が円滑に進むように、三つの学習段階を見開き２ページでレイアウトされている。また、ＡＢ判、ワイドな紙面を活用して、図版を大きくして資料性を高めるよう配慮されている。

次に、Ｃ者である。初めに、「この教科書で学ぶ皆さんへ」と題して、学習の流れが示されている。そして、「基礎編」では、姿勢や筆の持ち方の写真を明示、「本編」の１年生の内容では、小学校で学んだ筆使いが確認できるように工夫されている。

「学びを広げる」では、「活字と手書き文字」、「筆順」、「文字の変遷」、「部分別行書一覧表」、「書の古典」等が掲載され、書写に対する興味・関心を高めるように配慮されている。

「書いて身につけよう」では、毛筆で学んだことを硬筆に生かすことができるように、硬筆による書き込みのページが設けられ、さらに、他教科の学習や日常生活、社会生活でも活用できるように配慮されている。

「身のまわりの文字」では、日本の文字文化や手書き文字の魅力を伝えるなど、文字文化の豊かさに触れられるように工夫されている。

単元冒頭の「書き方を学ぼう」では、書き方のポイントを取り上げ、各単元で学習すべき内容が明確になるように工夫されている。

巻末の「資料編」では、学習して身に付けた文字が日常生活にどのように生かせるかを考えるように工夫されている。

鉛筆のキャラクターやイラストを用いたり、学習目標を問いかけの言葉にしたりするなど、生徒が親しみを感じながら学習を進められるように配慮されている。

重要な項目は大きな文字や目立つフォントで示したり、記号類には色覚の特性による差が少ない色を用いたりするなど、カラーユニバーサルデザインにも配慮したものとなっていると感じた。

最後にＤ者である。初めに、「目的に合わせて書こう」と様々な書く場面が明示されており、目的や相手を意識しながら学習活動を進められるように工夫されている。

また、「学習の進め方」では、生徒の活動する様子の写真とともに、進め方が分かりやすく示され、学んだことが日常生活に生かされることを理解できるように配慮さ

れている。

さらに、「書写をとおして学んでいくこと」では、３年間で身に付けるべき力が示され、見通しを持って学習に取り組めるように工夫されている。

そして、小学校までの書写の学習を振り返り、ノートの書き方を確認することで、中学校の書写学習へ円滑に接続できるように配慮されている。

各学年の「コラム」は、「季節の行事と書写」や「あの人が残した文字」、「日本建築と『書』」等、日本の伝統と文字文化を理解し、関心が高まるように身の回りの多様な表現と文字文化の豊かさに触れられる内容になっている。

「目標」、「考えよう」、「生かそう」、「振り返ろう」、「学習や日常生活に生かそう」という流れで教材が構成されており、主体的・対話的で深い学びが展開されるようになっている。

また、身に付けた知識及び技能を教科等横断的な学習活動や日常生活に活用するために、多様な例示を掲載し、イメージしやすくなるように工夫されている。

毛筆の手本は、紙面に対するバランスが実際のものと同様になっており、全体をイメージしながら練習に取り組めるように配慮されている。

教　育　長　各発行者の特長についてのご意見をいただいたので、次は４者から３者に絞っていただきたい。

中　村　委　員　Ａ者、Ｂ者、Ｄ者である。

花　輪　委　員　Ａ者、Ｂ者、Ｄ者である。

里　村　委　員　Ａ者、Ｂ者、そして三つ目はパスさせていただく。

吉　田　委　員　Ａ者、Ｂ者、Ｄ者である。

阿子島　委　員　Ａ者、Ｂ者、Ｃ者である。

教　育　長　Ａ者が５、Ｂ者が５、Ｃ者が１、Ｄ者が３で、３者に絞ると、Ａ者とＢ者とＤ者となる。それでは、最終的な絞り込みを進めていきたい。この３者について確認したいことや、ご質問、ご意見があればお願いしたい。

（質疑なし）

教　育　長　それでは、最終的な絞り込みで、どの発行者の教科書がよろしいのかご意見をいただきたい。Ａ者、Ｂ者、Ｄ者について推薦をいただきたい。

吉　田　委　員　２者に絞り込むならば、Ａ者とＢ者である。内容的には大きな違いはないが、何といってもＡ者は別冊があるということが特長である。別冊があることで、教科書へ直接書き込むという行為をなくすことができ、毛筆から硬筆への発展学習が生かされることが期待できる。

一方、Ｂ者は、教科書のサイズが大きいことで、見やすいと同時に、学習の初めの指示が非常に明確である。すなわち、学習に対して見通しが持てるという利点がある。どちらにするか、しばらく考える時間をいただきたい。

中　村　委　員　少し悩んでいるところではあるが、内容をより濃く出し、学年ではなく内容で区切っていること、文字を学び、伝統文化や日常等に関連付けていくという観点から、Ａ者の方が良いのではないかと思う。

里　村　委　員　非常に優劣付け難いがたいが、全体的に生徒がなじみやすいのではないかという印象からＡ者を推薦したい。

花　輪　委　員　個人的にはＤ者の教科書も好きであるが、大所高所に立てば、私はＡ者を推す。「書写ブック」が分かれていること、中身が詰まっており、１年生から３年生までの学習

をコンパクトに掲載していること、後ろに資料集を付けるという構成が、やはり卓越して、優れている。恐らく学校現場では、書写の時間を確保することに非常に苦労されているかと思うが、その中において使いやすい教科書としては、A者が優れているのではないかと推察する。

阿子島　委　員　私もどちらの教科書もとても分かりやすく、小学校から中学校への引き継ぎも詳しく掲載されているが、どちらかというと、A者がより分かりやすく表記されていると感じたので、A者を推薦したい。

教　　育　　長　各委員から絞り込みのご意見をいただき、A者を推す意見が多かったが、吉田委員、いかがか。

吉　田　委　員　学習を学年ではなく、内容で区切るという構成は、特長のある編集であり、他の委員がA者ということであるならば、私もA者で構わない。

教　　育　　長　各委員からの考えを頂戴し、A者を推すということでまとめたい。書写については、A者を採択の候補としてよろしいか。

（異議なし）

教　　育　　長　それでは、書写については、以上ご議論いただいた内容を採択理由として事務局に整理してもらい、７月 29 日に最終的に決定したいと思う。

ここで一旦休憩時間とする。

（休憩　午後３時 40 分～午後３時 55 分）

教　　育　　長　それでは協議を再開する。

指　導　主　事　中学校英語について説明する。

中学校英語では、外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して簡単な情報や考えなどを理解したり、表現したり、伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を育成することを目指し、

「（１）外国語の音声や語彙、表現、文法、言語の働きなどを理解するとともに、これらの知識を、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けるようにする」、「（２）コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて日常的な話題や社会的な話題について、外国語で簡単な情報や考えなどを理解したり、これらを活用して表現したり伝え合ったりすることができる力を養う」、「（３）外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う」ことを目標としている。

新しい学習指導要領では、「英語」に関して、「各校種段階の学びを接続させるとともに、外国語を使って何ができるようになるかを明確にする」、「外国語による言語活動を通して、簡単な情報や考えなどを理解したり、表現したり、伝え合ったりするコミュニケーションを図るために必要な知識及び技能、思考力、判断力、表現力等、学びに向かう力、人間性等の資質・能力を育成する」という趣旨で改訂が行われた。

協議会において、取りまとめた中学校英語の全発行者の特長は、別添２の別紙１、８～９ページにお示ししている。

主な特長については、まず、A者は、学習活動を通して理解したことを図や表にま

とめさせるなど、思考力、判断力、表現力等の育成を図ることができるように工夫されているということである。

次に、Ｂ者は、世界とのつながり、グローバル化等を意識させる内容で、小学校の学習内容の復習を設けるなど、小・中学校連携した学習内容の充実を図っているということである。

次に、Ｃ者は、日本文化の発信や異文化理解、環境、平和、人権、共生等の題材を扱い、多様なものの見方に気付き、国際理解を深められるように配慮されているということである。

次に、Ｄ者は、スモールステップで学習場面が設定されており、系統的な学習を通して基礎的な知識・技能が確実に身に付けられるように工夫されているということである。

次に、Ｅ者は、視野が広がるような題材を取り扱い、「Activities Plus」を活用しながら、生徒が主体的に学習に取り組むことができるように工夫されているということである。

次に、Ｆ者は、生徒の身近な活動と関連したストーリー性のある設定により、生徒の学習意欲を高め、生徒が主体的に取り組めるように工夫されているということである。

教　育　長　ただいまの事務局の説明についてご質問、ご意見があったらお願いしたい。

（質疑なし）

教　育　長　それでは、各発行者の教科書見本本についてご意見をいただきたい。

吉　田　委　員　英語についても、授業改善の三つの観点から見させていただいた。

まず、Ａ者である。生徒への興味・関心を持たせるという点では、１年生の冒頭で３年間の学習場面となる地域や学校が絵地図で示され、これからの学習に期待を持たせる編集となっている。全ての学年が学校生活から始まることを基本としているが、１年生においては、直面している新しい学校生活が学習舞台だけに関心も高まるものと思われる。

見通しについては、各レッスンの扉には、３部構成の学習のポイントが記されているとともに、全体構成がパターン化されており、学習の流れを把握することに有効であると感じた。

振り返りについても、各パートの終わりの書く活動や、各レッスンの終わりの対話を通した振り返りと文法を通した確認により、技能の定着を図っている。

さらに、各学習のくくりごとに既習事項を活用させる場面や寸劇を取り入れて英語学習への親しみや定着を図ろうとする内容になっていることや、学年３か所で設定されている特設ページでは、制作活動やプレゼンテーション、ディスカッションの活動を通した発展的な学習がなされる設定となっている。

続いて、Ｂ者である。Ｂ者は、１学年の学習の始まりが小学英語の振り返りから始まり、スムーズな移行に配慮されている印象を受ける。

また、Ａ者同様、１年生初めの単元が中学校での生活場面を通しての学習であるため、英語学習を身近なこととして受け止めることができるものと思われる。

さらに、学年の初めには１年間の学びの道筋が示されているとともに、目次と一緒に具体の学習内容も示され、いつの場面でどのような学習を行うのかが分かるようになっている。

振り返りについては、１単位時間ごとに各活動での学習事項の確認をしたり、単元ごとに自己評価したりする場面が設定されている。

生徒間の協働的な学びについては、ペアやグループでの活動、プレゼンテーション、ポスターセッション等の生徒同士の活動が多く設定されている。

学びを深めることについては、年間十数箇所に設定されている、話す、聞く、書く、読むの活動を通して、学習したことを定着させる提案がされている。

また、学年３、４か所ある学び方に関するコーナーでは、英語学習のポイントやコツが示されていることも特長である。

その他として、教科書のサイズとの関係だが、紙面構成に余裕があり、見やすい印象を受けた。

次に、Ｃ者である。Ｃ者もＢ者と同様、小学校での英語で学習したことの確認から始まり、中学校での学習の不安を取り除き、期待を持たせて臨ませるような意図が感じられる。

巻頭では、３年間の学習の道筋とともに、該当学年の具体の学習内容を示し、見通しを持った取組ができるようにするとともに、各学習のまとまりの冒頭に目標を設定していることや、学習展開のくくりが明確で、学習のステップが分かるように編集されている。

文法学習の位置付けも一定しており、学習のリズムを感じる。

振り返りについては、各目標の達成状況についてセルフチェックをするシステムを取っている。学習ごとにペア、グループ等によるスピーチやディスカッション等の様々な活動を設定し、生徒間の協働での学習場面が数多く設定されている。

また、深い学びに関しては、各学年４～６か所の生活を想定した場面の中で、聞く、話す、読むなどの英語活動を展開しており、学習内容の定着と発展を図っている。さらに、各学年５～７か所の特設ページで、表現活動を通しての英語力の向上を目指していること等が特長である。

その他の事項として、主にスピーチの場面でマッピングの手法を用いながら考えを整理し、確かに伝える力を高めようとしていることが印象に残った。

次に、Ｄ者である。まず、小学校での英語の学習状況を確認し、中学校での英語学習にスムーズに移行することに配慮するページを取っており、１年生も期待を持って中学校での英語に取り組めるようになっている。

また、各学年の巻頭に掲載されている写真と学習タイトルで表されている１年間の学習内容は、生徒たちに学習に対する期待と見通しを持たせる動機付けになるものと思われる。

さらに、見通すという点については、学習のくくりの初めに設定されている目標が各時間のテーマと連動していることで、各時間の課題として意識付けることができるものと思われる。

生徒間の協働については、「Let’s Talk」の学習の際、ペア学習が数多く提案されていることが特長である。

その他として、学習過程の構成が分かりやすく、単元全体の学習内容における各時間の位置付けが明確で、生徒たちが学習のリズムをつかみやすい構成となっている。

続いて、Ｅ者である。Ｅ者も小学校での英語を学習内容を確認した後に中学校での学習に進むことで、スムーズな移行に配慮している。目次のページもタイトルと写真

で構成され、学習への期待と見通しを持たせる内容になっている。

その他、学習への見通しについては、他者と同様に、大単元の冒頭に学習目標を設けるとともに、学習の流れが、学び、振り返り、文法で補完するという構成がなされ、生徒にも学習展開が認識しやすい構成になっている。

また、大単元の終わりに設定されている振り返りの場面では、学習事項の確認と学習したことを生かす聞き取り学習で確かな定着を目指している。対話的な学びについては、既習事項を生かして学習内容を深める場面でペア、グループ活動が提案されている。

さらに、各学年２～３か所に設けられている発展的な学習場面では、創作活動、集計活動、紹介等のスピーチを取り入れたり、長文を読み取る活動を設定したりして学びを深める編集がなされている。

最後にＦ者である。Ｆ者も小学校での英語から中学校での英語へとスムーズな移行ができるよう配慮がなされ、ページ数も確保されている。また、イラストが多用され、生徒にもなじみやすい印象を与えるものである。

学習の見通しについても、他者同様、各単元の初めに学習の目標が設定されているとともに、領域名を記し、位置付けを明らかにしていることが特長である。

学習の振り返りについては、各単元の終わりに既習事項を生かした、読む、書く等の観点を設けて、生徒の意識化を図りながら確認と定着を図っていることが特長である。

各学年３か所に設けている特設ページで、五つの領域に統合した形でプレゼンテーション、ポスターセッション、創作活動等の表現活動を通して英語力の高まりを求めていることも特長として受け止められる。

花　輪　委　員　この教科は、聞く、話す、読む、書くの４技能を習得し、コミュニケーション力を養うとともに、他文化への理解を深める力を身に付けることを目標としている教科であると理解した。

今回、６者から教科書が提案されているが、いずれの者も多様な教材を扱い、また、４技能を様々な場面で導入するなどの工夫を行っている良い教科書である。

外形的には１者のみが大型のＡ４判を採用し、残りの５者はそれよりも３㎝から４㎝ほど短い、ＡＢ判を採用している。

３学年の総ページ数は、多い者で539ページ、少ない者で453ページ強であり、この差は、歴然である。どの者も中心教材に加えて様々な補助教材を導入するとともに、巻末には、３学年合わせる100ページ程度の資料を付けている点が特長である。以下、各者への寸評を述べる。

Ａ者についてである。総ページ数が539ページで、最も分量のある者である。単元は「Lesson」と呼ばれて、年間に七つから八つの「Lesson」を設けている。途中「Project」を設け、年３回、グループでの学習活動を求めている。

各単元末には「Get Plus」を設け、さらに学びを発展させるとともに、「文法のまとめ」において振り返る構成になっている。

１年生の後半から３年生まで、「GET」で知識を得て、「USE」で実践する、といった「GET」と「USE」を組み合わせた構成としている点も特長である。

さらに、表示を含めて「話す活動」について、対話する「Talk」と発表する「Speak」に区別して取り扱っている点が特長である。

Ｂ者である。この者のみがＡ４の大型の教科書を採用している。どの学年も導入と１年間の学習の見通しを冒頭に分かりやすく示している点が特長である。

各学年とも「Stage１」から「Stage３」の３ブロックに分け、各「Stage」には「Unit」と呼ばれる単元を複数配置している。「Stage」の最後には、「Stage Activity」というグループでの学習活動を取り入れている。

また、１年生後半以降は、本文を学んだ後に「Let's シリーズ」として、「Let's Write」等、４技能を実践的に学べるような配置をし、リズミカルな構成にしている点が特長である。

文法に関しては、年間複数回、テキストの途中に分かりやすく２ページの分量でまとめられている点も特長である。

Ｃ者である。この者の単元は「PROGRAM」と呼ばれており、１年生では年間 10 テーマほど準備されている。また、他者とも同じであるが、「Our Project」と呼ぶグループでの学習活動を３回ほど準備している。本文の他、「Power-Up」という欄でその発展型を、「Steps」でその実践を、「Word Web」で語彙力を増すような仕かけを設定している点が特長である。

さらに、３学年とも巻末に「アクションカード」を使った生徒同士の学びを奨励している点や、非常に多くのページで、発音に関する注意喚起をしている点も特長であり、語学学習における音韻学の重要性が叫ばれていることを強く意識したものと好感が持てる。

Ｄ者である。総ページ数が 453 ページと一番コンパクトにまとまった教科書である。この者の単元は「Unit」と呼ばれ、１年生では 10 テーマ準備されている。また、グループでの学習活動を２回設定している。

教材の配置やその構成が非常にシンプルで分かりやすいという点が印象的である。具体的には、左側のページに「Get Ready」として本文を、右側のページに「Target」として文法的なことを、その下の「Practice」、さらにその下の「Use」で実践練習を行うという構成である。１年生で９回と、ところどころに「Let's Talk」として生徒同士が話し合う実践的な練習の場面を多く設けている点も特長である。

Ｅ者である。この者の単元は「Lesson」と呼ばれ、１学年では九つ準備されている。また、「Project」と呼ばれるグループでの学習活動も年に数回準備されている。

その他に、「Tips」と呼ばれるコーナーでも個人のアクティブラーニングが要求されているページがある。４技能の中でも、特に reading に多くの補助教材を配置し、力を入れているとの印象を持った。

巻末の「Activities Plus」では、教科書に印刷された赤字の部分が見えなくなるように、赤色のシートが付いており、自学自習を推奨しているように思われる。これは３学年とも掲載されており、とてもユニークな試みである。

Ｆ者である。この者は、総ページ数が 525 ページと多い方である。単元を「Unit」として、１学年六つから八つ準備しているが、分量的には他者と同じである。

他者と同じく年間３回、「You Can Do It!」というコーナーでグループでの学習活動を要求している。

単元と単元の間には、「Daily Life」、「World Tour」、「Let's Read」等のコーナーが設けられ、より幅広く英語に親しむように工夫されている。特に、「World Tour」のコーナーでは、世界へ目を広げ、異文化を理解するための良い教材になっている。

また、この者だけは、３学年すべてに帯教材「“その場で”スピーキング Let's Talk！」が綴じ込まれており、短い言い回しでも良いので、とにかく生徒同士で話してみようとい

う働きかけがあり、大変好ましいと思った。

阿子島　委　員　まず、A者からである。冒頭に「ことばを使う　かかわる　考える　学ぶ」と、「この教科書のしくみ」に、学習の構成が掲載されている。基礎的・基本的な知識・技能を習得させるために、各「Lesson」で段階的に４技能５領域を学ぶ内容となっており、コミュニケーション能力を図る資質・能力を養うように工夫されている。

１年生の導入では、「Lesson３」まで小学校で体験したことや学習したことの整理ができるように工夫されている。

また、自ら英語学習を継続できるように、自立的な学習をサポートする資料が各学年に掲載されている。教科書のページの下には、小学校で聞いたり、話したりしていた語句が掲載されている。日本の伝統文化や各国の多様な文化、社会貢献、環境問題等の話題を通して、伝統と文化を尊重する態度、他者理解、社会参画への意欲が養われるように工夫されている。

「Lesson」ごとに見通し、習得、活用、振り返りに分けて段階を踏んだ指導を行うことができるように配列されている。レッスンの「GET」で基礎を習得し、「USE」で主体的で深い学びを引き出すための目的や場面、状況に応じた言語活動を設定し、思考力、判断力、表現力等を養うように工夫されていると感じた。

どのページも写真やグラフ、文字、記号等の色の組み合わせや濃淡とカラーユニバーサルデザインに対する配慮がされている。

次に、B者である。冒頭、「英語で世界とつながろう」、「目的や場面、状況に合わせてコミュニケーションしよう」、「学習の見通しを立てよう」とテーマが掲載され、学習の進め方が明示されている。意思や情報を伝え合う言語活動等を繰り返し行わせることで、考えを深め、知識と技能を確かなものとし、コミュニケーションを図る資質・能力を育成するように工夫されている。

小学校とのつながりが分かる「CAN-DO リスト」が示されており、小学校での学習をスムーズに接続させることができるようになっている。１年生の教科書のページの下には、「小学校の単語」等が掲載されている。

「Unit」では４技能５領域を活用した文法の学習、「Stage Activity」では自己表現、「Let's」では、実践的なコミュニケーション能力を伸ばすねらいのもと、まとまりのある構成になっている。

単元の中で知識・技能の習得・活用を繰り返しながら思考力、判断力、表現力等の育成を図り、音声や映像から気付きを促し、主体的に学習に向かうように工夫されている。身近な話題から世界につながる話題を取り上げ、意欲を高められるように工夫されている。

ペアやグループでの言語活動が豊富に用意され、対話的な学習につながるように配慮されている。

本文の理解の助けとなるような写真やイラスト等が適度に配置されている。

次に、C者である。初めに、「この教科書で学ぶみなさんへ」と題して、学習の構成が見通せるようになっている。４技能５領域が「PROGRAM」ごとにバランスよく配列されており、コミュニケーションを図る資質・能力を育成するように工夫されている。

１年生の巻頭、文字の書き写しと小学校の既習事項の定着を図る課題が配置されている。学習入門期にはリスニング等を多く取り入れ、身近な話題を用いて小学校との接続を図り、学年が上がるにつれて世界に視野を広げるなど、発達の段階に応じた内

容になっている。

各「PROGRAM」に帯活動として「Try」が数箇所ずつ配置され、やり取りを通して語彙の定着を図り、学期ごとに「Our Project」で発展的な学習ができるように工夫されている。

日本の伝統文化や職場体験、日本や世界の偉人等を題材として取り扱っており、他教科との関連に配慮されている。

３学年を通じて表紙のテーマがそれぞれ出発、探究、世界へと発達の段階に応じており、一貫性のあるデザインとなっている。色覚の個人差を問わず、見やすくなるように配色されているなど、カラーユニバーサルデザインの考えに基づいた配慮がなされている。

次に、Ｄ者である。初めに、「この教科書の使い方」が分かりやすく説明されている。身の回りの幅広い題材を取り上げ、４技能５領域をバランスよく配置した言語活動を通じて、コミュニケーションを図る資質・能力が養えるように配慮されている。３年間、巻末の「Can-Do リスト」を通して生徒自ら学習を振り返り、何ができるようになったかをつかむことができるように工夫されている。

１年生では、小学校との学びの接続を意識し、音声と文字、語彙、表現を基にスパイラルな学習ができるように工夫され、学年間の学びをつなぐように配慮されている。

日本と外国との食文化や祭りの違い、共通点を知ることで異文化への理解を深めるとともに、自国の良さを改めて考えられるように工夫されている。

見開き２ページを使い、本文読解から言語活動まで設定されている。「Word Box」を用意し、ペアやグループで考えをまとめたり、伝えたりする際に活用させることで、対話的な学びを充実させられるように工夫されている。

生徒の多様な個性に配慮できるよう、主となるページでは学習項目の位置を固定し、学習の流れを把握しやすくなるようなデザインに配慮されている。題材に関する写真やイラストについては、レイアウトを工夫しながら豊富に使用し、生徒にとって分かりやすく魅力のあるものに配慮されている。

次に、Ｅ者である。冒頭、「この教科書で英語を学ぶみなさんへ」で、学習の構成を説明している。世界や日本、身近なこと等の題材を通して、幅広い知識を習得し、コミュニケーションを図る資質・能力を養う工夫がなされている。

学習の到達目標「Goal」や巻末には全ての学年の「Can-Do 自己チェックリスト」が明記され、生徒が目標を確認しながら学習に取り組めるように工夫されている。

お盆とハロウィン、日本と外国の学生生活との比較等を通して、他国の文化を尊重し、日本の伝統文化や郷土の良さを改めて考えることができるような題材を掲載している。

小学校英語を生かした小・中学校の接続やそれぞれの学年の学びの準備としての学習に十分に配慮した工夫がなされている。

コミュニケーションを図る資質・能力を育成するために、学習した内容に関連する技能、領域におけるポイント等が記載され、総合的に学習できるような内容に工夫されている。

巻末の「Activities Plus」を活用することで、話すこと、やり取りを充実させ、対話的な学びを通して主体的に取り組めるように工夫されている。

写真や挿絵、図表等がバランス良く色彩豊かにレイアウトされ、学習への興味を喚

起するように工夫されている。

次に、Ｆ者である。初めの「本書の構成」に各学年の目標が掲載されている。「Unit」や「Part」ごとに４技能５領域をバランス良く配置した言語活動が設定されており、コミュニケーションを図る資質・能力を育成するように工夫されている。

日常の学校生活で見られる場面を取り上げて、日本文化や世界の現状、国際社会の平和と発展と幅広い話題に触れ、生徒の興味・関心を引くように工夫されていると思う。

１年生の早期に小学校の既存事項を振り返ることができるように配置されている。「Part」ごとに聞く、話す、読む、書くの４技能５領域を使った活動と単元の「Goal」に複数の技能を統合した表現活動を設定し、学習効果が上がるように配慮されている。

帯活動として、イラストを参考に各「Unit」のストーリーを自分の言葉で伝える「Story Retelling」や「スピーキングドリル」、「“その場で”スピーキング Let's Talk！」を配置し、表現力の育成が図られるように工夫されている。

生徒が親しみやすい漫画のキャラクターが登場し、学校生活を中心としたストーリーの展開を楽しみながら英語を聞いたり、音読したりする工夫がなされているように感じた。イラストや写真の大きさ等、紙面構成を工夫し、生徒が内容をイメージしやすいように配慮されている。

中　村　委　員　各者とも巻末に単語などを配した付録があり、とても充実していて、各者共通で非常に良いと思った。

まず、Ａ者についてだが、１年生の導入では、小学校の学習内容を振り返り、丁寧で分かりやすく整理されており、中学校の英語にスムーズに入っていけるように工夫されている。

アニメ、落語等の日本文化や外国文化を紹介しており、日本の良さ、そして外国文化を尊重する態度が育成できるように工夫されている。

よく知られている作品を教材にするなど、生徒が興味・関心を持って学習できるようになっている。

日常生活や世界の環境問題と幅広い内容の教材が掲載されており、その中で、他者と関わりながら進めていく活動がとても豊富だと感じた。

１年生では「Our New Friend」、２年生では「My Dream」、３年生では「For Our Future」のように中学校生活に即した題材が配置されていて、好ましい。

また、各「Lesson」の終わりには、「文法のまとめ」があり、学習内容の定着が図られるように工夫されている。

Ｂ者である。巻頭に世界とのつながり、グローバル化等、英語科を意識させるような工夫があり、生徒が興味を持って授業に臨めるのではないかと思った。

１年生の初めには、会話活動や小学校の学習内容の復習が設定されており、英会話にスムーズに入っていけるように工夫されている。

コミュニケーション力の育成を重視しており、様々な場面で考える力を発揮できるように配慮されている。

日本の食や伝統文化についての教材を通して日本の良さに気付かせ、外国の生活文化との違いをより深く理解することができるようになっている。

また、この者だけだが、Ａ４判と大きくゆったりしたページ構成になっている点も特長である。

Ｃ者である。１年生の巻頭に小学校の学習内容の定着を図る内容が掲載されており、中学校の学習にスムーズに入っていけるように配慮されている。

各学年で学校生活に沿った教材が配置されており、生徒が見通しを持って学習できるように工夫されている。学習内容が習得、思考、表現と段階的になっており、基礎・基本が定着するように工夫されている。

また、手話や日本文化、職場体験等、身近な内容を取り扱っており、親しみやすくほかの教科との関連にも配慮がなされている。日本の伝統文化の紹介や外国の食文化についての題材を通して、日本の良さを理解し、外国の文化を尊重する態度が育成されるように工夫されている。

さらに、巻末に「アクションカード」があり、主体的・対話的な学びができるように配慮されている。

Ｄ者である。全体的に行間や挿絵の空間が多く、とてもゆったりしており、読みやすい。

１年生の教科書では、小学校の学習内容のつながりを意識し、音声、文字、語彙、表現が学習できるように工夫されている。

日本の文化や人々に焦点を当てた教材が多く取り入れられており、外国の文化との違いや共通点を知ることで、改めて日本の良さを考えられるように工夫されている。

学習項目の位置が色付けされて同位置にあり、生徒にとって分かりやすい編集である。

生徒が取り組む学校生活、防災学習、地域活性化等の課題が英語で学べるように工夫されており、他教科との横断的な学習ができるように配慮されている。

また、冒頭の「Unit」紹介は、生徒が学習への期待と見通しを持って学習に臨めるようになっている。

Ｅ者である。表紙裏、見開きに本編の内容とリンクしたダイナミックな美しい写真が掲載されており、また、「Lesson」ごとのタイトルページにも大きな写真を掲載し、興味・関心を持って入っていけるように工夫されている。

日本と外国の学校生活等を比較して、他国の文化を尊重し、日本の伝統文化の良さを改めて考えることができるように工夫されている。

１年生の教科書では、小学校との学びの接続を踏まえ、すごろくや音声教材等の学習活動が配置され、スムーズに中学校の学習に入っていけるように工夫されている。

文化やスポーツ、自然等、様々な内容が取り上げられており、その教材を通して課題を、生徒が自分の事として考えられるように工夫されている。生徒が日常生活で実際に体験することが教材となっており、興味・関心を持って学べるようになっている。

また、４技能のうち、読みにとても力を入れているという感じがした。

Ｆ者である。小・中学校の接続を考慮し、既習項目にマークを付けるなどの学習がスムーズに移行されるような配慮があって、学習が進めやすくなるように工夫されている。

「Your Coach」というコーナーでは、生徒が主体的に学習を継続することができるような工夫が紹介されている。

各単元の初めに、学習目標が示されており、見通しを持って学習が進められるように工夫されている。

ストーリー性がある教材により、興味・関心を持って学習意欲を高め、主体的に学

習できるように工夫されている。

学校行事と深く関連する教材が多く取り上げられており、興味を持って学べるようになっている。

また、教材の間にある「World Tour」は、生徒が英語に楽しく親しめるような内容になっており、「“その場で”スピーキング Let's Talk！」は、間違いを恐れず、話してみようという教材であり、これはとても良い取組であると感じた。

里　村　委　員　寸評の前に一つ確認をさせていただきたい点がある。

中学校の英語の教育というと、４技能のバランスが必ずしも良くないという指摘がされているように聞いている。また、読む活動に多くの時間を使うという調査結果もあり、高校受験における reading パートの配点が高いということもその原因になっていると考えられる。

そこで質問だが、文法と reading を中心にした授業から speaking や writing を含めた４技能をバランス良く教える授業にするために、教師にとってより有効的で使いやすい教科書はどういうものなのか。使いやすい教科書という視点から英語の教科書の採択に当たりたいと思うので、その着眼点を教えていただきたいと思う。

指　導　主　事　学習指導要領の目標は、外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、簡単な情報や考えなどを理解したり、表現したり、伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を育成することを目指すという文言で始まる。

ここでの言語活動という言葉だが、実際に英語を用いて互いの考えや気持ちを伝え合う活動という意味を持っている。よって、聞くことや読むこと、話すこと、書くことの４技能をバランス良く教えるために、教師によってより有効で使いやすい教科書を見ていくことが大切だということである。選択するための着眼点としては、実際に英語を用いて互いの考えや気持ちを伝え合う言語活動に適した内容、あるいは構成になっているかということが考えられるが、教科書採択に関しては、仙台市の採択の観点に照らし合わせて総合的に判断するものであるということもお含みおきいただきたい。

里　村　委　員　Ａ者から申し上げる。Ａ者は、まず内容がしっかりしていて、自信を持ってこの教科書を作ったという印象を持つ。

また、単語の習得に加えて、しっかりとした読解力向上への取組も感じられる。

さらに、知識の習得から活用へと学びを進め、思考力、判断力、表現力等の育成が図られるように種々の工夫がなされている。

英語の四つの技能のうち、話すことを「talk」と「speak」に分けて、四つの技能を、五つに分けて整理している。

加えて、英会話の学習がスムーズに進むよう配意されている。

読み物教材としては有名な文学作品を取り入れており、興味・関心を継続して持ち続け、有効な言語活動が行われるような工夫がなされている。

Ｂ者である。英語の目標を意識させるため、登場人物の出身国や人種が多様で、グローバルな社会を意識させるように配慮されている。

また、他者に比べて内容の充実度が際立っている。英語の教科書であるため、海外のことが多く書かれる傾向にあるが、発行者によってはアメリカが中心になっているものもある。しかし、Ｂ者は、内容に偏りがなく非常に多様化している。

英語の四つの技能のうち、話すことについては、やり取りと発表に分けた整理をしている。これはA者にも言えることであるが、B者においては、知識・技能の定着が図られるように学年間に系統性を持たせている点が特長である。

A４サイズの大判で、ページごとに多岐にわたった内容が展開されており、１年生では文章に使われる手書きのような大きなフォントが特長である。

C者である。日本の文化や海外の文化を知る題材を多く配しており、生徒に国際的なことの理解を深められるように工夫されている。各学年で学校生活に沿った題材も多用しており、学習の見通しが立てやすいのではないかと思う。

特に、１年生で小学校の学習内容の定着を図るために、小・中学校の接続を強く意識した構成となっている。

また、登場人物は生徒がなじみやすいキャラクターを使用している。一方、写真等はアメリカを主体とする写真を活用している。

D者である。日本の文化や人々に焦点を当てた教材とし、海外の文化との違いを意識させつつ英語を学ぶ内容にしている点で工夫が見られる。

文法、表現等の理解から定着までステップを追って系統的に学習できるように配慮されているとともに、基礎的な知識・技能が確実に身に付けられるように工夫されている。

C者と同様に、１年生では文章に手書きのような大きなフォントを使用している点が特長で、小学校から中学校への移行がスムーズにいくように工夫されている。写真やイラストも多数掲載されているという点も特長と言える。

E者である。全体のページ構成が分かりやすい。また、各学年に二つから三つの長文の題材が含まれており、reading に力を入れていると同時に、発展的な学習にも有益な取組ができるよう配慮されている。

「Activities Plus」によって、生徒が主体的に会話の学習にも生かせるように工夫されている。

四つの技能のうち、やり取りと発表に分けた整理をしている。

１年生から３年生まで同じキャラクターを登場させるなど、生徒の興味が継続するように工夫されており、写真や絵を上手に活用している。

E者の特長としては、世界の中の日本、あるいは地域の立ち位置、広がり、文化の比較といった視点からの教材作りがなされている点である。

F者である。F者は、日常生活や学校行事等、身近な活動と関連した題材を配して、生徒から見ても違和感なく教科書の中身に入り込める内容になっている。

特に、小学校から中学校の学習への移行に配慮がなされている。

１年生の教科書には、キャラクターを多用し、文章よりも単語学習に重点を置いたことを伺わせる内容になっている。これにより、英語を苦手とする生徒を多く出さないような効果も期待されるように思う。

巻末付録に文法事項がまとめられており、学んだことの確認や整理に役立つように配慮されている。

教　育　長　各委員からそれぞれの発行者の特長をお話しいただいたので、次の段階として、それぞれ推薦する発行者を３者ずつ挙げていただき絞り込みを進めていきたい。

中　村　委　員　A者、B者、F者である。

里　村　委　員　A者、B者、F者である。

吉　田　委　員　Ａ者、Ｂ者、Ｃ者である。
花　輪　委　員　Ｂ者、Ｃ者、Ｆ者である。
阿子島　委　員　Ａ者、Ｂ者、Ｆ者である。
教　　育　　長　Ａ者が４、Ｂ者が５、Ｃ者が２、Ｆ者が４という結果である。３者に絞り込むということでＡ者、Ｂ者、Ｆ者の３者について進めていきたいと思うが、Ａ者、Ｂ者、Ｆ者に関して確認したいことや質問があればお願いする。
里　村　委　員　昨年、小学校の英語の教科書の採択にあたり議論したことは、英語は音やコミュニケーションというポイントが大事であるということと、世界の中での日本、あるいは文化を比較するという視点が非常に大事だということである。そういう観点からより優れた教科書を選びたいと思うが、小学校の採択における観点を中学校においても援用する形でよろしいか。
　英語というのは、国語や数学、理科といった教科とは別に、世界とのつながりを促進することや、人と人とのコミュニケーションを大事にするということが観点の一つであり、小学校の教科書を採択する際も議論されたかと思う。こういった英語の持っている本質的なことを中学校でも受け継いでいくべきかということである。
指　導　主　事　学習指導要領にコミュニケーション能力を育てることが外国語の目標であると記載してあるので、やはり様々な題材を通した言語活動を行うことで、子どもたちが外国の方々と関わったり、国際社会で生きていくためのコミュニケーション能力を育てたりすることが大事であり、それは中学校でも同じである。多様な題材を提示し、子どもたちに考えさせ、その中で資質・能力を養っていくということについては小学校も中学校も変わらないと考える。
教　　育　　長　他にご質問、ご意見等はあるか。
（質疑なし）
教　　育　　長　それでは、先ほど申し上げたＡ者、Ｂ者、Ｆ者の３者について最終的に１者に絞り込んでいきたい。各委員から、どの発行者の教科書を推されるかについてご意見をいただきたい。
里　村　委　員　グローバルな人材をどのようにして育てていくかというときに、単に英語を教えるだけではないという考え方が大事である。そういった観点から、国際的な視点からページが構成されているＢ者を推薦したい。
教　　育　　長　Ｂ者を推すご意見があったが、他の委員はいかがか。
花　輪　委　員　私もＢ者がやはり一つ頭抜けていると思った。大判だけあって、分かりやすく、構成が非常にリズミカルである。１年生の前半は小学校から中学校への移行の時期なので、多少違った構成になっているが、１年生後半からは主文があって、「Let’ｓシリーズ」で４技能を習得するという点が非常にリズミカルで印象的だった。Ｂ者を推したいと思う。
中　村　委　員　どれも甲乙付け難く、Ｂ者とＦ者で悩んでいる。
阿子島　委　員　いずれの教科書も国際色も豊かで、話題もとても豊富だった。その中ではやはりＢ者が、サイズが大きいせいか、色々な情報が入っており、生徒にはそういった刺激があるのも良いと感じた。コミュニケーションもより豊富に取っていけるのではないかと思うので、Ｂ者を推薦したい。
吉　田　委　員　Ａ者は、各学年の導入が、徹底して学校の場面から入っており、１年生で絵地図が出ていて、非常にイメージ化しやすい。振り返りにおいても、領域を踏まえた振り返

りを一貫して３年間続けており、構成が非常に明確で、子どもたちも取り組みやすい教科書となっている。

一方、Ｂ者は、阿子島委員からの発言にもあったが、多くの学習要素が含まれており、内容がとても豊富である。私にとっては豊富すぎるのではないかと心配するくらいであったが、小学校での学習を踏まえた生徒たちにとっては、問題ないようにも思えるので、Ｂ者を推薦したい。

教　育　長　中村委員はＢ者の他にＦ者という発言をいただいたが、他の委員の声を聞いて、いかがか。改めて伺う。

中村委員　私も吉田委員と同じく、Ｂ者の内容が豊富な部分が気になっていたが、小学校ですでに教科として学んでくることを考えると、Ｂ者で異存はない。

教　育　長　それでは、ご議論を踏まえ、総合的な観点からＢ者を採択の候補と取り扱ってよろしいか。

（異議なし）

教　育　長　それでは、英語については、以上ご議論いただいた内容を採択理由として事務局に整理していただき、７月 29 日に最終決定したいと思う。

次に、道徳について協議を行う。

指導主事　中学校道徳について説明する。

中学校道徳では、中学校学習指導要領第１章総則の第１の２に示されているように、道徳教育は、教育基本法及び学校教育法に定めた教育の根本精神に則り、人間としての生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者とともによりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことに基づき、基盤となる道徳性を養うため、生徒が道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てることを目標としている。

新しい学習指導要領では、「特別の教科　道徳」に関して、従前の道徳的価値及びそれに基づいた人間としての生き方についての自覚を深めることを、学習活動を具体化して道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習と改める、という趣旨で改訂された。

協議会において取りまとめた中学校道徳の全発行者の特長は、別添２、別紙１の 10～11 ページに示している。

主な特長については、まず、Ａ者は各教材に「考えてみよう」「自分にプラスワン」での自分の考えを「道徳ノート」に記述し、自己を見つめ直すことができるように配慮されているということである。

次に、Ｂ者は、いじめ問題と情報モラルについては、「深めたいむ」で、読み物教材で学んだ価値をさらに深く実感を伴って考えることができるように工夫されているということである。

次に、Ｃ者は、全ての題材でねらいが明確にされており、導入から「学びの道しるべ」へと考えを深める発問が設定され、深い学びにつなげられるように工夫されているということである。

次に、Ｄ者は、「学習の手がかり」「考えを広げる・深める」の内容が生徒の思考の流れに沿っており、自主的・発展的な学習ができるように配慮されているということ

である。

次に、E者は、「考え、話し合ってみよう　そして、深めよう」で、ポイントがまとめられ、議論が起こるような仕かけが施されており、実践に結び付くように工夫されているということである。

次に、F者は、「深めよう」や「クローズアップ」「クローズアッププラス」等の特設のページが設定されており、自主的・自発的な学習が展開できるように配慮されているということである。

次に、G者は、多様な教材を取り上げることで、生徒の興味や経験を大切にし、「つぶやき」コーナーで自分の考えを書き留めることで思考を深められるように工夫されているということである。

教　育　長　ただいまの事務局の説明について何かご質問等あればお願いしたい。

花　輪　委　員　道徳について、小学校は担任の先生が指導されていると思うが、中学校の場合はどういう考え方で運用されているのか。

指　導　主　事　道徳科は、主として学級の児童を理解している学級担任が計画的に進めるものであるが、学校の道徳教育の目標を達成させる意味から、学校や学年として一体的に進めるものでなくてはならない。そのために、指導に際して全教師が協力し合い、指導体制を充実させることが大切となる。

道徳科の指導体制を充実させるための方策としては、まず、全てを学級担任任せにするのではなく、特に効果的と考えられる場合は、道徳科における実際の指導において、他の教諭等の協力を得ることも考えられる。

花　輪　委　員　各中学校によって工夫されており、学校の実情に応じて運用されているとの理解でよろしいか。

指　導　主　事　そのとおりである。

教　育　長　他にご質問等はないか。

里　村　委　員　道徳の教科書を採択するときに、防災、安全、あるいは環境資源やエネルギー、多様性、文化伝統、キャリア教育等といった今日的な課題への取組は、学習指導要領等でどのように関わってくるのか。道徳においても、取り上げる課題は時代とともに大いに変わっていかなければいけないと思うが、学習指導要領にどのように明記されているのか確認をさせていただきたい。

指　導　主　事　学習指導要領では、現代的な課題を道徳科で授業に取り上げるように示している。各者においても積極的に現代的な課題に関する教材を扱っている。道徳科の内容で扱う道徳的諸価値は、現代社会の様々な課題に直接関わっている。学習指導要領では、道徳的諸価値についての理解を基に、広い視野から多面的・多角的に考えることができる思考力を育てることも求められている。

特に、今おっしゃったような現代的な課題や相互理解、寛容、公正、公平、社会正義、国際理解、国際貢献、生命の尊さ、自然愛護等については現代的な課題との関連の深い内容であると考えられ、発達の段階に応じてこれらの課題を積極的に取り上げることも大切である。

教　育　長　他にご質問等があれば、お願いしたい。

（質疑なし）

教　育　長　それでは、各発行者の教科書見本本に対してご意見をいただきたい。

花　輪　委　員　この教科を私なりに表現すると、自分を取り巻く自然環境と人間社会の中で、より

良い生き方について様々な観点から考えることができる力を身に付けることを目的としていると思う。

今回、７者から教科書の提案があった。各者の考え方で作成したそれぞれ特色のある教科書が提案されたと思う。

外形的にはＡＢ判と、高さは同じで幅の狭いＢ５判をそれぞれ３者ずつ採用している。また、２者は別冊、道徳ノートを付けている。ノートを除く本体の総ページ数は、３学年合わせて、多い者で 592 ページ、少ない者で 504 ページとなっており、少ない者には道徳ノートが付いている。

教材の内容は、①自分のこと、②人との関わりのこと、③集団や社会との関わりのこと、④命や自然のことの４分野に分かれている。者によってそれぞれの教材の数に差があり、各者に特色がある。特長的な者については寸評の中で述べることとする。

まず、A者である。１学年当たり 40 ページの別冊「道徳ノート」が付いている。ノートは、定型的な内容で、これにより自学自習ができるように工夫されている。各教材の末尾に、「考えてみよう」「自分にプラスワン」のコーナーがあり、各項目で一つずつ考える視点が示されている。

教材では、「『いじめ』と向き合う」、「よりよい社会と私たち」、この二つのテーマを重点に置いた構成である。いじめに関しては、１学年当たり五つ以上の教材で扱っている。四つの分野では、③集団や社会との関わりに関するものが３学年合わせると 46 教材と多く採用している点もこの者の特長で、社会との関わりを考えさせるような学習内容となっている。

次に、Ｂ者である。１学年を三つの「シーズン」に分けて教材を配列しているのが特長である。例えば１年生では、「自ら考えて」、「広い視野で」、「共に学び合いながら」が３シーズンのコンセプトである。また、「シーズン」の中でも複数の「ユニット」を設けてテーマを明示している点も特長である。いじめも一つのテーマとなっている。

①の自分に関わることに関する教材が３学年で 27 教材と、他者に比べ一番多く取り扱っている点もこの者の特長である。

各教材の末尾には「考えよう」、「見方を変えて」、「つなげよう」があり、学習のポイントを示している。途中に横書きの「広げよう」のページやグループでの学習活動のための「深めたいむ」等を配置して、学習の活動の幅を広げるような工夫をしている。

Ｃ者である。いじめや差別のない社会、命の尊さについて考えるための教材を多数採用しているのが特長である。また、１年生では２か所に計八つのいじめの教材を集中して配置するなど、時間をかけてしっかり身に付くような工夫をしている。

教材の表題の下に問題提起の文章があり、また、末尾には「学びの道しるべ」があり、３項目程度の問いかけがなされている。

活動の項目としては、１学年当たり２項目程度だが、「やってみよう」というグループでの学習活動コーナーが準備されている点も特長である。

この者は、592 ページと最もページ数の多い者で、じっくり教材を味わわせたいとの意図を持っているように感じる。

Ｄ者である。別冊に１学年当たり 44 ページの「中学生の道徳ノート」を持つ者で、このノートの中にも 25 ページ分の補助教材を掲載している。残りの 19 ページ分が学習の記録のためのページに割り振られている。

教材には、４分野中、どの分野の教材なのかが明示され、末尾には、「考える・話し合う」の欄があり、考えるポイントが明示されている。

いじめに関して、教材の中では明示されていないものの、巻末に近いところで取り上げている。また、情報機器の活用に関しても留意している教科書となっている。

偉人の言葉を教材の末尾に示す工夫をしている。全般的にシンプルなデザインで使っている本とも統一されており、親しみやすい教科書に仕上がっている。

Ｅ者である。構成がダイレクト、直接的であるとの印象である。具体的には、四つの①から④までの分野をそのまま配列している。４分野の中では③集団や社会とのかかわりに関することを多数採用している点や、理解を助けるために、教材と教材の間には関連するエッセイを挿入している点が特長的である。

いじめの問題に加え、ＬＧＢＴ問題も取り上げている点も特長的である。

教材の末尾には、「考え、話し合ってみよう　そして、深めよう」の３項目で考える観点を問題提起している。

教科書の大部分で同じ大きさ、同じ書体のフォントを使っているため、非常に親しみやすい教科書に仕上がっている。

Ｆ者である。この者は、冒頭に「見つけよう」、「考えよう」、「話し合おう」、「生き方につなげよう」の４ステップで学ぶことを強調して説明している点が印象的である。

教材では、①自分に関するものを比較的多めに採用している。教材のほかに「クローズアップ」や「クローズアッププラス」等、多数配置し、生き方の選択肢を広げる工夫をしている。

また、１学年当たり二組程度、「ユニット学習」としてテーマを掘り下げるように工夫されている。

また、命を考える教材には、特別なマークが目次のところに付けられており、それらを重視していることが伺える。

この者の教科書は、教材や副教材が非常に豊富で、様々な仕かけがなされている教科書であるとの印象を持った。

Ｇ者である。この者は、教材の中では④命や自然との関わりに関する内容を他者に比べて多く取り上げている点が特長である。

教材の配列では、いじめに関する教材と命の尊さに関する教材をまとめ、集中的に学べるように工夫されている。また、教材名よりも単元名を前面に出している点が特長で、何を目的に学ぶかが、その単元名を読むことですぐ分かるような工夫がなされている。

教材の末尾には、「考えよう」、「自分を見つめよう」の二つの欄があり、それぞれ１項目ずつ考える視点が提起されている。

巻末にはホワイトボードと「心情円」があり、生徒同士の話し合いを促すような教科書となっている。

全体的に先生方の裁量を尊重している教科書であるという印象を持った。

阿子島　委　員　まず、Ａ者からである。目次に続き、「道徳科で学ぶこと」、「この教科書で学ぶテーマ」が掲載されて、35 の教材と様々なコラムから構成されている。問題解決的な学習、体験的な学習に適した教材が配列されており、多面的・多角的に考え、議論する道徳が実現できるように工夫されている。

「『いじめ』と向き合う」「よりよい社会と私たち」を全学年の重点項目とし、教材

とコラムをユニット化して、複数配置することで、定着を図るように工夫されている。
３年間における発達の段階等を考慮し、各学年がテーマ、「であう」「みつめる」「ひらく」を設定し、系統的・発展的に学習できるように配慮されている。「考えてみよう」や「自分にプラスワン」の発問等に関連付けて、自分の考えを別冊「道徳ノート」にまとめられるように配慮されている。
また、この「道徳ノート」を活用して自分の考えを整理したり、友達の意見を記入したりしながら、言語活動に取り組めるように工夫されている。
図版が鮮明で大きく配置されており、タイトルに登場人物のイラスト等が掲載されていることも、生徒の理解を深める一助となっていると感じた。
次に、Ｂ者である。初めに、「本書で学ぶ皆さんへ」と題して、教材を通して考えながら深められるように手引を用意したこと、「道徳の授業を始めよう」では、道徳の授業の内容が説明されている。
全学年を通して命の尊さ、いじめ防止に力点を置き、関連する教材を「ユニット」として複数設け、発達の段階に応じて考えを深める機会が設定されている。
付録を合わせた 35 の教材で構成されている。１年間を三つの「シーズン」、「自ら考えて」、「広い視野で」、「共に学び合いながら」に分け、それぞれに学びのテーマを設定し、系統的・連続的学習ができるように工夫されている。
教材ごとに手引を用意し、学びのテーマには生徒が教材を通して何を学ぶのかが示され、学習のねらいがはっきり意識できるように工夫されている。
各学年とも「深めたいむ」が配置され、読み物教材で学んだ道徳的価値を、活動を通してさらに深く考えられるよう工夫されている。
巻末の「学びの記録」では、１時間ごとの学びや気付きを書きとめ、学期や１年を振り返らせることで、生徒自身が変化や成長を実感できるよう配慮されている。
内容解説やイメージを豊かに広げるための絵や写真、グラフを必要な箇所に付し、本文の理解を助けるように工夫されている。
次に、Ｃ者である。目次の後、「道徳科で学びを深めるために」と、「この教科書で学んでいくテーマ」が掲載され、１年間の学びを見通せるようになっている。
いじめや差別のない社会、命の尊さを重点テーマとして取り扱っており、中学校３年間を通して繰り返し学習できるように複数の教材を組み合わせ、関連付けて指導できるように工夫されている。
１年生は、自分自身に関することを多く取り扱い、学年が上がるにしたがって、人との関わり、集団や社会との関わりに力点を置いて指導できるようになっている。
教材の導入でねらいを明確にして、見通しを持たせるとともに、「学びの道しるべ」では、物事を自分事として捉え、多面的・多角的に考えを深められるような発問が示され、自己を見つめることができるように配慮されている。
各学年、本教材 30 点、「補充教材」５点の構成で、各校の重点内容項目に合わせて補充教材と郷土資料等との差し替えができるように配慮されている。
学校行事、学級活動、生徒会活動とのつながりの深い教材が選定されており、多様な実践活動や体験に効果的に生かせるように工夫されている。
巻末の「道徳の学びを振り返ろう」では、生徒自身の生活や考えを振り返ることによって、一層の理解を促すことができるように工夫されている。
図表等の大きさや配置が適切で、どの教材も右ページから始まっており、見開きで

見渡せる構成になっている。

次に、D者である。本冊と別冊「中学生の道徳ノート」からなり、１年生は「自分を見つめる」、２年生は「自分を考える」、３年生は「自分をのばす」がテーマとなっている。

いじめや人権に関する課題について、複数の内容項目に関する教材を通して、多様な観点から道徳的価値の理解を深め、発達の段階に応じて生徒が自分自身のこととして多面的・多角的に考えられるように工夫されている。

人物教材や地域に関わりの深い教材を用いることで、郷土や伝統文化を愛する心を育てることができるように工夫されている。

ねらいを明確にするために、各教材には「学習の手がかり」が示されており、生徒が１単位時間の授業において見通しを持って学習できるように工夫されている。

35 の主教材について発達の段階に応じた「thinking」のページを設け、学びを広げることができるように工夫されている。

各教材末尾の「考えを広げる・深める」では、生徒の主体的・対話的で深い学びを促すように発問例が掲載されている。

本冊、巻末には特集を設けることで、現代的課題や日常生活に関わる内容等に理解ができるよう教材が構成されている。

教材の活字が大きく、印刷は鮮明で、生徒に見やすいものとなるように配慮されている。

教材の内容に沿ってイラストや図表及び写真等が効果的に配置されており、生徒が内容を理解しやすいように配慮されている。

次に、E者である。目次に続き、「道徳科って何を学ぶの？」、「教科書の使い方」が掲載され、１年生は「生き方から学ぶ」、２年生は「生き方を見つめる」、３年生は「生き方を創造する」というテーマに基づき、系統的・発展的に学習できるように配慮されている。

いじめ防止に関しては、本書全体で正義、寛容、人権、人間愛と様々な主題で教材を取り上げている。伝統文化や他国を尊重する心を育むために、歴史上の人物や全国各地の教材等を数多く取り上げている。

37 教材が配列されており、内容項目順に教材が配置してあり、各地域、各学校の特色や方針によって自由に教材を組み替えることができるように配慮されている。

巻頭に考え方の手順を示すことで、物事を広い視野から捉え、人間としてのより良い生き方について考えを深めることができるように工夫されている。

生徒が教材と同じような生活体験を想像できるような内容が多く、ねらいとする道徳的価値についての問題意識を持ち、主体的・対話的で深い学びができるように配慮されている。

強く提示したいテーマの写真は、ページ全体を使い、生徒が親しみやすいイラストを挿入するなど、教材の場面を想像して学習に取り組むことができるように工夫されている。

次に、F者である。初めに、「新しい扉を開く」と題して、考えを深める四つのステップ、「見つけよう」、「考えよう」、「話し合おう」、「生き方につなげよう」が掲載されている。

全学年で生命尊重といじめ防止を重要テーマとし、時代に即した教材を用いており、

生徒自らが考え、議論することができるように配慮されている。

自分を見つめ、学びを振り返るページや生き方の幅を広げるための関連情報のページが設定され、学習の充実と発展が図られるように配慮されている。

全教材を四つの視点ごとに分類し、「よりよく生きるための 22 の鍵」という一覧で示しており、ねらいが明確で、まとまりのある内容となるよう配慮されている。

各学年 35 点の教材が準備されている。様々な分野で活躍する人を扱った教材や生徒の興味を引き出す絵や写真、図表等を取り入れた教材が多く、主体的・対話的で深い学びができるように工夫されている。

巻末に「学びの記録」が添付されている。図表や挿絵、写真の配置は視覚的に捉えやすいよう、本文との関連性に配慮されている。余白を適度に確保したゆとりのある紙面構成で、レイアウトも工夫されている。

次に、G者である。目次に続き、「道徳の授業はこんな時間に」、「１年間で学ぶこと」が明記されており、見通しを持って主体的に学習を進めることができるように配慮されている。

各学年にそれぞれに３教材からなる、生命尊重、いじめ問題対策をテーマにした内容でユニット化され、命を大切にし、思いやりや共生の心を育めるように工夫されている。

教材冒頭に示されたテーマに基づき、精選された二つの発問を通して考え、コラム等を生かして学習の充実を図ることができるように工夫されている。

各教材を内容項目ごとに四つの視点に分けた一覧表を配置し、関連的・発展的かつ重点的な取扱いの工夫ができるように配慮されている。

各学年、本編 35 時間の教材と付録５教材が用意されており、学校や学級の実態に応じて柔軟に指導できるように配慮されている。

巻末に各都道府県のゆかりの人物や伝統文化等の教材を配置し、郷土についての考えを広げられるように工夫されている。

新聞や漫画教材を採用して、学習の動機付けを図り、巻末の「心情円」やホワイトボード用紙で考えを可視化することにより、主体的・対話的で深い学びが実現できるよう工夫されている。

巻末には、「自分の学びをふり返ろう」が掲載されている。感動を与えたい教材では、写真を多く掲載したり、身近な教材では親しみやすい絵を掲載したりするなど、生徒の目線に立って図表等が配置されている。

中　村　委　員　Ａ者である。道徳科で学ぶことがＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄに区分され、マーク化されている。各教材のタイトル上に、自分たちはこの時間何について学ぶのかが分かるようマークで表されており、生徒が見通しを持って学習できるように工夫されている。

教材は、各学年に「『いじめ』と向き合う」、「よりよい社会と私たち」のように、同じテーマを並べるなどして、集中的に考えることができるように配置されており、対話的な学びを展開しながら重点的に指導ができるように工夫されている。

各教材の末尾には、「考えてみよう」、「自分にプラスワン」の二つの発問があり、内容と自分自身について主体的に考えられるように配慮されている。

「プラットフォーム」の活用により、学習内容を多面的に考えられるように工夫されている。

「道徳科での学び方」として、「気づく」、「考え、議論する、深める」そして「見つ

める、生かす」という流れになっており、学びをより深めるための手立てを紹介し、主体的・対話的で深い学びができるように工夫されている。

現代的、社会的な課題に対し、環境、伝統文化、国際理解の内容の教材をバランスよく配置している。

別冊の「道徳ノート」があり、「考えてみよう」、「自分にプラスワン」に関連付けて、自分の意見をより深く考えられるようになっている。

Ｂ者である。１年間を三つの「シーズン」に分け、さらにテーマに応じていくつかの教材からなるユニットを構成し、学習内容が理解しやすいように配慮されている。

各教材の末尾の「考えよう」では、学習内容に沿った発問で問いかけ、「見方を変えて」では、別角度から考えを深め、「つなげよう」では、学習内容を実生活に結び付けて物事を多面的・多角的に捉え、自分の生き方に結び付けることができるように配慮されている。

地域、伝統文化、国際理解の内容が適切に配置され、「考えよう」の内容も工夫されたものになっている。命の尊さに関する教材が「シーズン」ごとに入っており、系統的に掲載されていて、とても好ましいと感じた。

小学校で扱った教材を掲載し、自分の考えの変化や成長を感じ、より深い学びにつながるように工夫されている。

Ｃ者である。いじめや差別のない社会についての多様な教材から、自分自身の考えを深め、主体的な学習ができるように配慮されている。

教材は、各学年にいじめ、命の尊さ等の同じテーマを並べるなどして、集中的に考えることができるようになっている。また、教材の初めには、ねらいが明確に示されており、教材末尾の発問、「学びの道しるべ」へと考えを深められるように工夫されている。

学年が上がるにつれ、社会との関わりに関する教材を取り上げる比率が増え、広い視野を持って学べるように工夫されている。

Ｄ者である。命の尊さや人権尊重に関する教材が複数配置され、多様な観点から理解を深め、主体的に考えることができるように工夫されている。

教材に関連した格言や名言が掲載されており、生徒の興味・関心を高め、自己を見つめられるように工夫されている。

別冊「中学生の道徳ノート」があり、書くことを通して道徳的なものの考え方を深められるように工夫されており、本冊と併用し、自分の考えをより深められるような構成になっている。

教材の末尾にある「学習の手がかり」、「考えを広げる・深める」の内容が生徒にとって考えやすいような流れになっており、主体的で深い学びができるように配慮されている。

Ｅ者である。巻頭に道徳科で何を学ぶのかが掲載されており、道徳について切らすことなく考えることができるようになっている。

各教材の末尾に、「考え、話し合ってみよう　そして、深めよう」があり、主体的・対話的な学びができるように配慮されている。

その単元に関わりがある「もっと知りたい」では、単元に合わせて考えを広げ、深い学びができるようになっている。

「話してみよう」のコーナーがあり、自分自身を見つめ直し、クラスで話し合うと

いうことで、主体的・対話的な学習ができるようなきっかけになる内容になっている。

各学年の巻末に心の成長の振り返り表を掲載しており、１・２年生では１年間の道徳の時間の振り返りができ、３年生では道徳の記録として３年間の道徳の振り返りができるように構成されている。

Ｆ者である。主題名を表示しないことで、主体的に課題を発見できるような仕掛けになっている。一つのテーマに関連する複数の教材をユニット化し、集中的に考えることができるように配慮されている。

主体的・対話的な学習ができる「深めよう」や視野を広げられる「クローズアップ」、「クローズアッププラス」等のページが設定されており、主体的な学習ができるように配慮されている点はとても好ましい。また、こうしたページを活用して、自分の生き方について考えを深め、実生活につなげられるような構成になっている点も特長的である。

学校生活や伝統行事等と関連を図り、学びの必然性や必要性にもつなげられるように工夫されている。

Ｇ者である。教材は、各学年にいじめや命の尊さ等同じテーマを並べユニット化し、集中的に考えることができるように配置され、対話的な学びを展開しながら重点的に指導できるような工夫がなされている。

教材の冒頭にテーマが示されており、生徒がテーマに沿って学習を進め、自分の考えを深めていけるように工夫されている。

巻末に各都道府県にゆかりの人物や伝統文化等の教材を配し、郷土についての考えや視野を広げられるように工夫されている。

また、小学校で習った教材を掲載し、自分自身の考えの変化や成長を感じ、深い学びにつながるように工夫されている。

「考えよう」、「自分を見つめよう」で、内容と自分自身について主体的に考えるように配慮されているとともに、巻末には心情円、ホワイトボード用紙が切り取れるようになっており、主体的・対話的な学習に役立つように工夫されている。

里　村　委　員　Ａ者である。特に発達の段階や系統性に着意があり、小学校や高等学校との関連も考慮して、各学年共通したテーマを扱っている。

また、「私の生き方」では、人生の先輩からの意見等が掲載されており、道徳の学習が効果的に進められるのではないかと思う。

これから経験するであろう今日的課題にも、自分自身が前向きに取り組んでいけるように工夫されている。

いじめについては、全学年で履修する構成になっており、発達の段階に応じて繰り返し学習し、深い学びにつなげて行けるように工夫されている。

Ｂ者である。各学年の巻頭において、授業で何をどのように学ぶかを明確に示しており、生徒が安心して学びに入ることができ、深い学びにもつなげるように配慮されている。

特に、いじめ問題や、情報モラルについて読み物教材で学んだことをさらに実感を伴う形で深い学びにつなげるように工夫されている。

巻末の「学びの記録」を通じて、自分の成長を実感できるとともに、主体的な学びにもつなげるという工夫がなされている。

「見方を変えて」、「つなげよう」を通じて、日常生活との結び付きを考えながら関

連的、あるいは発展的な学習につなげていくように工夫されている。

Ｃ者である。道徳では、通常四つの分野に分けることが多いが、Ｃ者は六つの分野に分け、色分けした構成になっている。自分自身、それから人との関わり、集団と社会、生命や自然、生命の尊さ、いじめや差別のない社会という区別の中で、教科書が作られている。

生徒にとって、教材の具体的な目標が示されていることから、深い学びに円滑につながるのではないかという期待がある。

文章を読む教材に加え、漫画をはじめ、多様な教材が掲載されており、道徳を広い視点から安心して学ばせるように配慮されている。

３学年の間で少し色合いが変わり、１年生ではイラストや漫画、挿絵が多く、２・３年生では文字を読ませるという変化が見られる。生徒の実態に即した年間指導計画を立てやすくしているのではないかと思う。

Ｄ者である。生徒の思考の流れに沿って手掛かりを与え、考えを広げ、深めるといった内容構成になっており、自主的・発展的な学習につながるのではないかと思う。

本冊と別冊の２冊構成とし、別冊の「中学生の道徳ノート」には、自分で記述することを通じて、自分の成長や理解を深めさせる工夫がなされている。

いじめや人権に関する課題については、多様な観点からの学びを深めさせようという工夫がなされている。情報機器の活用による発展的な学習にも試みが伺える。

Ｅ者である。「自分自身と向き合う」、「人とのかかわり」、「集団や社会とのかかわり」、「自然や崇高なものとのかかわり」という４章からなる。生徒の主体的な学びを引き出す、理解を深めるということを目的として、各教材に内容項目を示し、生徒自身が何を学ぶのかを明確にしているところが特長的である。

「届けたい言葉」という欄を通じて、いじめ等に関して皆で取り組むことの大切さを学ばせる構成になっている。

教科書全体として文字、写真、絵も含めて、色合いが落ち着いており、親しみが持てるように配慮されている。

Ｆ者である。巻頭で「考えを深める四つのステップ」が示されており、言語活動とリンクした教科道徳としての学びを深めさせる工夫がなされている。

震災やいじめに限らず、多岐にわたる題材を取り上げており、生徒の考えを深めさせる内容がとても豊かな教科書だと思う。

一方で、主題名を表示せずに自ら考えさせたり、課題を見付けさせたりする仕掛けにより、深い理解を促そうという工夫も伺える。

ゆったりとした教科書のサイズで、大きな写真や、挿絵を使って抵抗感を薄れさせるような配慮が見られる。

Ｇ者である。生徒一人一人を大人扱いしているという姿勢がすばらしい。多くの今日的課題への取組をはじめとして、優れた内容になっている教科書の一つだという印象を持った。

書かれている内容は、社会勉強にも通じ、また、しっかりとした長文を読ませることで、道徳が日本語教育の一端を担っているのではないかということを感じさせる教科書である。

さらに、小学校で取り上げた題材を再度取り上げて、現在の自分の考えと比較させるような内容もあり、自分の成長を外から押し付けられるのではなく、自ら自然に感

じ取れるような手法も評価できる。

吉　田　委　員　これまでと同じく、授業改善の三つの観点から見させていただいた。

まず、A者である。学習の見通しの点では、各教材タイトルの上に主題を示し、本教材から学び取ることを明らかにしている。また、あらかじめ登場人物について認識させ、教材の読み取りをスムーズにすることによって、考える時間や話し合いの時間の確保への配慮がなされている。

教材の終わりに主題に結び付いた問いが設定され、教材の内容を振り返るとともに、次に設定されている自己の生活を振り返る問いに発展させることで、学びを深めることにもつながっている。

対話的学びについては、各学年初めに議論や意見を交換する光景を紹介し、併せて各学年四つの特設コーナーで話し合いをすることで互いの意見の交流を促す提案をしている。

深い学びについては、各時間の活動だけでなく、主に現代的な課題に関する内容で特設ページを設け、学習内容を様々な場面につなげて考え方や視野を広める手立てを講じている。

その他の事項として、仙台市の重点内容項目について多くの教材で編集されているとともに、いじめや生命の尊重についてのユニット化がなされていることと、さらに、「道徳ノート」があることが特長である。

B者である。学習の見通しについては、教材の初めに内容項目が記され、どのような学習を行うのかイメージしやすくなっているとともに、教材の終わりにいくつか学習の手引が示されており、学びの道筋が見えるよう工夫されている。

また、教材に関する振り返りの視点が示されるとともに、中には視点を変えて考えさせる問いかけがなされ、深い学びへと発展させることができるよう配慮されている。

対話的な学びについては、各学年初めに、道徳の学び方で触れられており、特設しているようなページはないものの、各教材における学習の手引の内容を通して、対話の必要性を促す意図が働いているように感じられる。

深い学びについては、単に自己の生活の中で考えさせるだけでなく、一部参考図書を紹介する等、読書を通して学習したことを発展させることを目指している。あわせて、各学年２種類の特設ページやコーナーを４か所ずつ設け、前の時間の学習を広げたり、深めたりする場面も設定している点が特長である。

C者である。学習の見通しについては、各学年の巻頭に、授業パターンを紹介し、道徳学習のスタイルを身に付けさせようとする提案をしているとともに、各教材の始まりに主題を文章化して、読み取りの場面を示しているところに特長がある。

学習の振り返りについては、教材の終わりに学習の手引的なコーナーを設け、中心発問の要素を含みながら、教材の主題について考えさせたり、生徒間での話し合いを促したりしている。また、この話し合いについては、そのほかにも特設ページの中で、各課題について生徒間での議論を促す提案もしている。

深い学びに関しては、他者にも見られるが、学習の手引的なコーナーで、自己の生活の様子を主題に合わせて振り返る問いかけをしている点と、特設ページで役割演技や話し合いで学習したことを深める機会を設けている点が特長である。

その他として、生命の尊重やいじめに関してはユニット化した編集をしている。

D者である。教材の初めに主題名を記すようなことがなく、教材の終わりの学習の

手引の部分での「学習の手がかり」を基に、学習への見通しを持たせる方法が取られている。

学習の振り返りについては、他者同様、学習の手引のコーナーに生徒への問いかけがあり、自己の生活について改めて考える提案をする等、道徳の実践化を図っている。また、この学習の手引のコーナーの名称が、３年間全ての教材を通して「考える・話し合う」となっており、まさに考えて議論する道徳を印象付けるものになっている。

深い学びについては、各学年３か所に設定されている特設ページのコラムが前の教材をさらに深めて学ぶ機会としているのが特長である。

その他として、各学年の巻末に情報モラルやいじめ、生命の尊重などの現在の課題に関する特設コーナーを設けていること、資料集とノートを兼ねた別冊があることが特長である。

Ｅ者である。豊富な文章量を通して、しっかりと内容を読み取って学習する教科書であるという印象を受けた。

学習の見通しについては、各学年の巻頭に道徳の学習の仕方が記され、どのような順序で１単位時間が展開されるのかがイメージできるようになっている。その中で、生徒間の多様な考え方を知るための話し合いの仕方が記されている。

また、学習の手引のコーナーでは、「考え、話し合ってみよう　そして、深めよう」というタイトルが３年間全ての教材に設定されており、学習の積み上げがなされることによって確かな道徳的実践力を身に付けられるのではないかと思われる。

Ｆ者である。まず、見通しを持って教材の読み取りをさせるために、タイトルの下に主題に関わる問いかけをしていることが特長である。

また、登場人物をあらかじめ把握させ、教材の読み取りをスムーズに進める配慮がなされている。

振り返りについては、他者同様、教材の終わりに主題に結び付いた問いが設定され、教材内容を振り返るとともに、生徒間の話し合いにも生かされるように工夫されている。

対話的学びについては、各学年６か所で話し合いをすることを提案している特設のページを設定し、道徳における議論の大切さを示している。

深い学びについては、教材の終わりに主題に関わることを自己の生活に理解させるような提案がなされている。

また、各学年十数箇所で前に学んだ教材の内容を深めたり、生活に生かしたりするための特設のコーナーが設けられていることも特長である。

その他の事項として、写真やイラスト等が大きく掲載されていることが印象に残った。

最後に、Ｇ者である。教材の初めに主題を大きく掲げ、本時の学習で何を学ぶのか、その方向性を見出せる編集になっている。

振り返りについては、他者と同じように主題に呼応した形で問いがなされ、１時間の学習をまとめると同時に、話し合いの提案にも結び付くような内容になっている。

対話的学びについては、各学年の初めに、「話し合いの手引き」を掲載するとともに、各学年の２か所でワークシートを用いて話し合いを促し、巻末には話し合いを深めるためのツールの綴じ込みをしていることが特長である。

また、深い学びについては、教材の終わりに自己を振り返り、道徳の実践化に結び

付くような問いかけがなされているとともに、各学年５か所の特設ページを設け、補助的教材を設定しながら、前の時間に学習したことを補完し、深めるための編集をしていることが印象的である。

その他として、全学年を通していじめ問題対応と生命尊重がユニット化されていることも特長である。

教　育　長　各発行者の特長についてご意見をいただいた。最終的な１者に向けて絞り込みを行っていくので、各委員３者挙げていただきたい。

里　村　委　員　Ｄ者、Ｆ者、Ｇ者である。

阿子島　委　員　Ａ者、Ｂ者、Ｇ者である。

中　村　委　員　Ｂ者、Ｆ者、Ｇ者である。

吉　田　委　員　Ａ者、Ｂ者、Ｇ者である。

花　輪　委　員　Ｂ者、Ｃ者、Ｇ者である。

教　育　長　いただいたご意見を集計すると、Ａ者が２、Ｂ者が４、Ｃ者が１、Ｄ者が１、Ｆ者が２、Ｇ者が５という結果で、Ａ者とＦ者が２で並ぶが、このまま議論を進めていきたい。

Ａ者、Ｂ者、Ｆ者、Ｇ者、の４者についてご質問、ご意見があればお願いしたい。

（質疑なし）

教　育　長　それでは、１者に絞り込みをしていきたい。どなたでも結構である。ご意見等をお願いしたい。

花　輪　委　員　Ｂ者とＧ者というのは、外形的にはすごく似ているが、教材にプラスして色々な副教材で深く考えさせようとしているのがＢ者である。Ｇ者については、里村委員の「生徒を大人として扱っている」という表現が良い表現だと思ったが、生徒も教師もその裁量を委ねているという潔さがＧ者にはあると思った。そういった観点からも非常にシンプルな構成で、ダイレクトに教材から考えさせるという意図が見えるＧ者を推薦したい。

阿子島　委　員　どの教科書にも郷土を考える項目が入っているが、Ｇ者には全国的な都道府県にゆかりの人物や伝統文化も記載されており、話題性も豊富で、話を発展させる上で良いのではないかと思うので、Ｇ者を推薦したい。

吉　田　委　員　私が推した３者それぞれに特長があって、良さがある。Ａ者は教材内容の起承転結がしっかりしていることで、子どもたちも読み取りやすく、教科書と連動したノートも、誰もが同じペースで授業を展開できるという点で有効な教材であると思った。

Ｂ者もシンプルな構成で教材文に立ち向かっていろいろ考えることができる教科書である。また、一般化するために生活に振り返るというのではなく、一部だが、参考図書を紹介している点が、まさに幅を広げる新しい提案であり、Ｂ者の良さを感じた。

最後のＧ者は、考え、議論する道徳ということをまともに受け止めている印象で、資料にも起承転結性を感じるものである。話し合いの仕方についても一貫して様々な場面で触れられており、授業改善の三つの観点でみると、Ｇ者を推薦したい。

中　村　委　員　私もＢ者はとてもシンプルで、子どもたちもその教材に入り込みやすい教材になっている。一方、Ｇ者は自分で考えたり、グループで考えたりさせるなど、対話的な教材が盛り込まれており、自主的な考えが組みやすい作りになっていることが特長であり、Ｇ者を推薦したいと思う。

里　村　委　員　私もＧ者を推薦したい。ただし、これを使う先生方の負担になる可能性があるのではないかという心配を持っているので、学校のアンケート等を見て、Ｇ者を選ぶことに慎重な方が良いという意見がなかったか確認したい。

教育指導課長　Ｇ者に関して、学校からは効果的に指導できるような配列になっているというご意見を頂戴している。

里　村　委　員　それでは、Ｇ者を推薦する。

教　　育　　長　委員の皆様方から１者推薦のご意見をいただき、総合的な観点からＧ者が採択の候補と思われるが、よろしいか。

（異議なし）

教　　育　　長　それでは、道徳については、以上ご議論いただいた内容を採択理由として事務局に整理してもらい、７月 29 日に最終的に決定したいと思う。

以上で令和３年度使用の仙台市立義務教育諸学校教科用図書、中学校「国語」、「書写」、「英語」、「道徳」の採択についての協議を終了する。

４　閉　　会